石井勲の漢字教室

別巻 母と子の実践教室

Ⅰ 子どもはみな神童

Ⅳ いま全国の実践幼稚園で…

――現場からの報告



第Ⅰ章 実践園の登場とその前後

Ⅰ 誤解と偏見の中でウブ声を……

子どもたちの織り成すエピソードの数々

「歌詞を口頭で教えようとしたり、話し合いのなかで様々な意見が出たりすると、すぐ字で書いて欲しいと園児に要求される」（北海道苫小牧市・駒沢苫小牧幼稚園）

「漢字でどう書くの？ という問いがひんぱんに出る。親よりも早く起きて朝刊を取りに行き、拾い読みをする子もいる」（仙台市・東陽幼稚園）

「買い物に連れて行くと、街にある看板の字をどう読むか質問したり、得意になって読んだりする。電車の中で、覚えていた宮沢賢治の有名な詩〝雨ニモマケズ〟を朗読して周りの乗客をびっくりさせた。卒園生の中に、教科書では抜すいしか載っていないのでつまらないといって、原作を買ってもらい、全編読んで楽しんでいる子どもがいる」（東京足立区・梅鳥幼稚園）

「知能検査のため来園されたある専門の先生が、検査後、結果を漢字で記入していたところ、園児がそれを読んでしまい、先生は大あわてをしてしまった。テレビに〝○○劇場〟などの字幕が出ると、すらすらと読み、たまたま一緒にいたお客が、その子は幼稚園児なのに、いったい小学校の何年生なのかと尋ねた」（茨城県勝田市・市毛フレンド保育園）

「園児が母親と一緒にある親戚の家に行ったが、たまたまその園児は風邪をひいていたので、そこで薬を飲んだ。ところが覚えていた諺〝良薬は口に苦し〟といって飲んだものだから、親戚の人は目を白黒させて驚いた。四歳になる園児が教師に語ったこと……『先生、お日様が雲の上にかくれたから〝曇〟なのね。お日様が青い空に来たから〝晴〟なのね』……」（茨城県那珂湊市・堀川保育園）

ここに書き出したものは、全国各地の実践園で、園児たちが様々に繰り広げているエピソードの、そのなかのほんの一部です。まだまだたくさんのエピソードがあるのです。いずれも、ごく普通の子どもたちが、石井方式による漢字学習の実践を通して織り成した、日々の生活のなかのエピソードのひとコマに過ぎません。

これらを特別税する必要は全くありませんし、そうすることが、子どもたちにとってはひょっとしたら〝はた迷惑〟なくらい、ごく自然なできごとなのです。

おそらく、企国でいま、こうしたエピソードをいくつも引き起こしながら、幼稚園、保育園で漢字を通して楽しく遊び、学習をしている子どもたちは数万人に及ぶでしょう。

実践園の第一号は昭和四十三年に

昭和四十三年の四月に、大阪市の小路幼稚園など数園が、全国に先駆けて石井方式を採用してから、昭和五十八年現在までの十五年間に、その実践園は着実に増え続けて来ました。いまや、その数四〇〇に及ぶともいわれますが、このほかにも石井方式の〝看板〟を掲げることなく、しかし、実質的にそれを取り入れているところもかなりあるといわれ、それを含めれば、もっと多くの実践園があることでしょう。

ところで、前出の大阪の小路幼稚園を始め、そのころ、石井方式の採用に踏み切った先駆的な幼稚園……たとえば、川崎市のひかり幼稚園、東京足立区の梅島幼稚園、金沢市のかわい幼稚園などは、当時、石井方式に対して、まだ理解が浅く、偏見すらあった状況のなかで、根拠のない中傷をあびる

こともありながら、努力を積み重ねてきたともいえます。

ひかり幼稚園の園長である吉田尚弘先生は、そのあたりについてこう述懐しています。

「昭和四十三年の五月、石井先生に初めてお会いしましたが、そのころ、私は、実は一つの悩みを持っていたのです。というのは、園児は年長になると、ほとんどがひらがなの絵本を声をあげて読むのですが、本当に意味がわかって読んでいる子は大へん少ない。そこで、この子どもたちにもっと意味を理解しながら本を読めるようにさせるにはいったいどうしたら良いか、ということが私にとって最も気がかりな点だったわけです。

もちろん、石井先生にご教示いただき、石井方式を採用してからは、この悩みはすっかり消えました。ただし、当初は、父兄の多くが、『漢字を教えるなんてとんでもない』と反対するし、第一、教える側の教師も、『保育学校ではそんな教育は受けていないし、幼稚園において文字教育をすること自体が間違っている』と主張する人もあって、説得し、実施に移るまでは、なかなか大へんでした。教材も全くといっていいほどない状態でしたし……」

こうした経験は吉田先生に限らず、このころ、石井方式の実践に踏み切った幼稚園の関係者には、



少なからず共通した苦労だったといえるでしょう。

もちろん、今では、当時とくらべ、その普及、拡大において、隔世の感があるわけですが、それでも、父兄、そしてとくに新任の教師のなかには〝漢字ショック〟を受ける人がないわけではありません。けれども、「石井方式を一たん採用したら、まず中止する実践園はない」との定評通り、そういう先生方が抱くのは〝食わず嫌い〟であるがゆえの、一時的な不満であり反対の気持ちなのですから、実際に、自分の目で見、あるいは自らの実践が子どもたちにもたらすすばらしい効果を知った途端、一転して石井方式に高い評価を与えることになるというわけです。

ちなみに、石井方式と初めて出会ったさいの当惑から、やがて短期間でそのすばらしさを理解するまでの〝心の変

化〟を、幼稚園に新任した先生の感想文から少し紹介してみましょう。ここでは、昭和四十四年の十月から石井方式を導入している梅島幼稚園に、五十八年の春、教師として新任した二人の方に書いてもらったものから引用してみます。

Ａ 先生の感想

「〝幼稚園で漢字を教える〟――この言葉を聞いて驚かない人は余りいないと思います。幼稚園の先生になろうと、幼児教育を志す人なら余計にそうか唇知れません。

私も、もちろん驚きました。いいえ、驚くというよりちょっと嫌な感じさえしました。それは石井先生の〝漢字で教える〟というお話を聞いたからといって、すぐに消えるというものではありませんでした。ただ、この二か月余り、子どもたちを見ていて感じることは、漢字に対して〝むずかしい〟とか〝嫌だ〟と思っているようには見えないことです。それどころか〝もっと知りたい、覚えたい〟という意欲を持っていることに驚かされる毎日です。

また、とくに感じることは、石井先生のおっしゃる〝漢字で保育する〟ということの大切さです。保育の中で、漢字が、漢字という特殊なものとして浮いてしまわず、日常使う言葉と同じように生活に密着したものであってこそ、生きるものなのだと感じるのです。（後略）」

Ｂ 先生の感想

「幼稚園で漢字学習を行なっているという話を、権島幼稚園に来るまで知らず、なぜ幼稚園で（漢字を）教えなければならないのか、疑問に思っていました。しかし石井先生や園長先生のお話を聞いて、不安や疑問も少しずつ自分なりに解決できました。それも自分で本当に子どもに教えてみて、子どもの顔の表情や反応を目のあたりに見て感じないと、わからないことで、今では、漢字を取り入れて行なっていることに自然に入っていけて、楽しくさえなってきました。（中略）

六月に入って〝猫に小判〟などの諺が出てくると、子どもたちは、猫がいたり、猫という漢字を見せただけで〝猫に小判〟といってみたり、鉄棒の支柱にしがみついて降りると、〝猿も木から落ちる〟といったりします。お弁当の前の手洗いの時などのさいも、今までに覚えた諺をいいながら順番を待っていることもあります。（中略）

勤め始めて三か月がたち、漢字教育において、様々なことにぶつかり、とても勉強させられました。これからは、子どもたちのすばらしい芽を伸ばすためにも、今以上に努力し頑張っていきたいと思い

ます」

全国の実践園で、とくに新任の先生方は、おそらく以上の様な経験を少なからず持ったことがあるかも知れません。いずれにしても、現在にして、まだ誤解を持つ向きがあるのですから、この十五年の歴史のなかでは、先にあげたひかり幼稚園の吉田尚弘先生と似た体験をした人は多々あったものと思われます。

〝パイオニア〟井上文克園長の回想

石井方式実践の〝パイオニア〟として知られる大阪市・小路幼稚園の園長である井上文克先生もまた、こうした苦難の道を歩んできた一人ですが、ちょうど、実践を始めて四年めを迎えた昭和四十七年に、井上先生はその間を振り返って「幼稚園における漢字教育の歩み」と題した一文を雑誌「漢字漢文」の第十号に書いています。当時を知る格好の材料と思われますので、その一部をここに紹介してみましょう。

「漢字教育が初めて本格的に幼稚園に実施されるようになったのは、わずか四年前、昭和四十三年四月以降のことである。『石井方式漢字教育を開始すべき場は幼稚園である』ことを最初に提案し、これを初めて実践したのは、かく言う私の幼稚園、小路幼稚園であった。

私は、この年の一月、石井先生をお招きし、仲間の園長たちを集めて、漢字教育のお話を聞く会を開いた。その時、初めて聞いた『幼児にとっては、鳩は鳥よりも覚えやすく、鳥は九よりも覚えやすく、漢字はかなよりも覚えやすい』という先生のお話には、一同すっかり驚いたものである。

私の園では、それ以前から、先生方に漢字教育の実践を奨めていたが、全部の先生方からきびしい反撃を受けて、なかなか実践に移すどころではなかった。そこで、石井先生の来阪を機に、幼児の実際指導をしていただき、それを先生方に見学してもらうことにした。

それまでは知る由もなかった字画の複雑な漢字を、提出するはしからたちまちのうちに覚えて、すらすらと読みこなしていく幼児の姿に、先生方は何か奇術でも見ているような思いに駆られたようである。しかし、それで、漢字教育に対する今までの不信が、ともかくも半信半疑の状態にまでは前進したように思われた。

『石井先生だから幼児があのように漢字を覚えるのであって、私たちにできるはずはない』と、恐

らくそう思ったに違いない先生たちであったろうが、恐る恐るやってみると、結果は全く石井先生がやったのと違わない。子どもたちはちゃんと漢字を覚えてくれるのである。そこで先生方には大いなる喜びと共に、『よし、やってみよう』という意欲が自然と湧き起こって、積極的にこの教育に取り組む姿勢が作られていった次第である。（後略）」

結局、昭和四十三年からは、この小路幼稚園をはじめ、大阪の文化幼 稚園、旭学園など数園の幼稚園で、漢字教育が開始されたわけですが、井上先生らの懸命な努力が効を奏し、その年のうちに、早くも実践園の集まりである幼年国語研究会が発足し、百園近くの実践園が参加するようになりました。以後、阪神、和歌山地区から、関東、北陸、九州沖縄と、全国へ着実に実践園の数は増えていくようになったわけです。

2 マスコミ報道にも力を得て……

この傾向はまた、マスコミにとっても看過するわけにはいかないところでした。一種の〝ブーム〟ととらえたあたりに、いささかの疑問がなきにしもあらずですが、ことに新聞は、こぞって、幼稚園における漢字学習のありようを報道したものです。

もちろん、それ以前にも、石井方式自体は様々な形でマスコミに取り上げられておりました。とくに、昭和三十年代後半以降、文部省の国語審議会を中心に論議が活発となった国語国字問題、とりわけ小学校の漢字教育をめぐる論争の中で、それは常に話題の焦点となっていました。

なかでも、昭和三十九年三月、第七期国語審議会に対し、吉田富三委員（東京大学教授、癌研究所所長＝故人）が、「小学校の漢字教育について、石井勲氏の主張と実績とを専門的に調査研究し、漢字教育の方式として採用に価するものとの結論を得れば、国として採用の策を講ずること」と提案をしたことや、四十一年三月四日付「朝日新聞」社説の「石井方式を考える」と題した、国語問題に関しての「いわゆる〝石井方式〟はこの問題解決へ、一つの考える素材を提供している」という提言などは、大きな波紋を呼んだものです。（〝吉田提案〟については本書の四一〇頁参照）

それはともかく、小路幼稚園などが実践を始めたこのころ、新聞が取り上げたもののうち、二、三の例をみてみましょう。

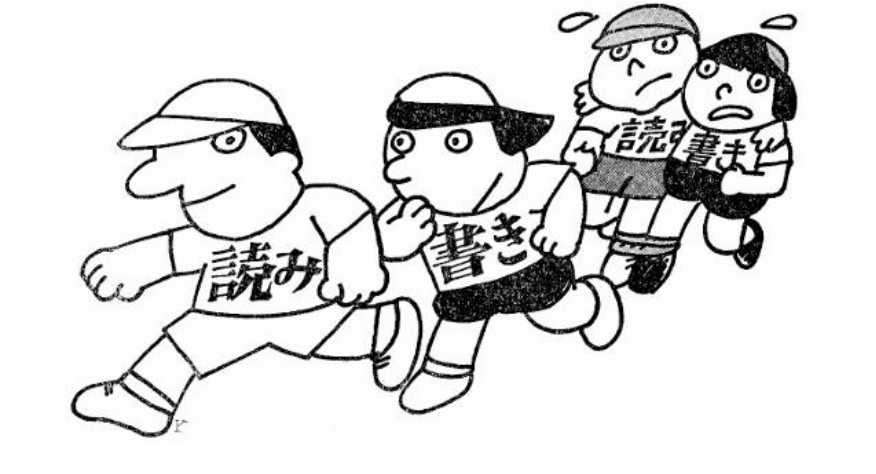
「漢字教育 幼稚園が効果的……二年間で一千字　かなより覚えやすい」

という見出しで、昭和四十三年七月十二日付「読売新聞」が、「漢字 はかな文字よりも幼児、児童の頭脳によどみなく浸透し、記憶力、思考力はグングン向上するという漢字教育理論が文部省の方針などおかまいなしに、小学校どころか幼稚園にも普及しだした」と報じ、その年の六月から石井方式を採用したひかり幼稚園の教室風景を大きく写真に出して、「めきめき効果を現わしている。大阪市とその周辺都市で四十の幼稚園が石井方式を採用したという」とも伝えています。

ここで興味深いのは、文部省の見解も併記している点です。「文部省はしぶい顔」という小見出しのあと、「これに対し文部省の玉越三朗教科調査官（幼児教育）は『漢字どころか、かなを幼稚園で指導するのさえ反対だ。具体的なことばを表現する努力こそすべきだ』と批判している」とあります。

文部省は、このころ、昭和四十六年度より、小学校六年間で教える漢字を、八百八十一字から九百九十六字に増やす決定をしており、いわば漢字教育の強化を目ざしていたわけですが、ちょうどそんな時期にもかかわらず、「漢字は小学校から」の原則を守ろうとする姿勢がよく現われているではありませんか。

この他、昭和四十四年三月十一日付「朝日新聞」では、子どもたちが、学校へ上がる前に相当数の漢字を覚えている状況と、石井先生の提唱する石井方式とを踏まえて出された、漢字の「読み書き分離、読み先習論」をめぐって、伝統的な「読み書き並行論」との漢字教育論争を取り上げています。



見出しは「読み優先か読み書き並行か　漢字教育にも時代の波――伝統説と現代説が対立」というもの。

その記事のなかに、第九期国語審議会の総会の席上、各委員が白熱の議論を展開したとありますが、そのなかで、実践女子大教授の阿部吉雄委員が口火を切って、「読んだ字は必ず書けるようにするという明治以来の教育方針に疑問がある。漢字を書くのは大きな負担だが、読むのはわりにたやすい。そこで、書くのはあと回しにして、まず読みの指導をしたらどうか」と発言し、その論拠として、幼稚園の指導で、幼児に一千字をた

やすく読めるようにした実例を引合いに出したといいます。これは明らかに石井方式の実験を念頭に置いた意見です。記事の最後の方には、「この問題を提唱した石井勲大東文化大講師の実験によると、ある幼稚園で〝鳩〟という字を〝はと〟と教え、翌日読ませたら百人中八十五人が正しく答えられたという。漢字を読ませるだけの教育で、この方式はいま東京、神奈川、大阪、和歌山、京都など約百か所の幼稚園で試みられている」と紹介しております。

このように、新聞に限りませんが、雑誌、テレビなどマスコミが、石井方式の紹介に果たした役割りは少なからぬものがあったとはいえると思います。

全国各地の実践園へ、石井方式採用の動機について聞いたところ、たとえば、神戸市のあさひ幼稚園の高沢三子園長は、次のような理由をあげています。

「十三年ほど前、ふとテレビのダイヤルを回していますと、番組名は忘れましたが、石井先生が子どもたちに童語をお話しながら、黒板へ漢字を書いていらっしゃる場面が出て参りました。拝見していますと、これは良いことだと思い、すぐ先生のお書きになった本を色々と取り寄せ、検討致しまして採用することに決めました。石井先生にも御来園いただき、今日までずっと努力しております」

石井方式採用の動機、キッカケは、マスコミの作用に限らず、このほかにも、各実践園によっていろいろとあるかと思いますが、とにかく、いずれの園でも、日々の努力の積み重ねが行なわれており、そのことがまた、年を追って実践園が増加することに、有形無形の影響を及ぼしているといえるでしょう。今日、全国で推定四〇〇に近い幼稚園、保育園に石井方式が導入され、活発な実践が為されている大きな要因は、そのあたりにもあるのではないでしょうか。

というところで、毎日、何万人もの子どもたちが、楽しく繰り広げる漢字学習の実践現場を少しくめぐってみることに致しましょう。

第2章 実践現場に集う数万人の子どもたち

ー ゼロからの出発

いまも〝先導役〟を担う大阪の実践園

昭和五十七年五月一日の時点で、日本にある幼稚園の数は公立、私立を合わせ一万五、一五二園。

園児数二二二万七、五五〇人（文部省調べ）。

二二〇万人余の園児のうち、いったい何人ぐらいが、石井方式による漢字学習を行なっているのか、正確な数はわかっていません。前にも書きましたように、実践園の数を四〇〇程度とすれば、やはり、数万人と表現するのが妥当なところでしょう。二二〇万人の中の数万人――この数字を少ないと見るか、そうでもないと見るかー評価の分かれるところかも知れませんが、およそ十五年前には、文字通り〝ゼロ〟だったことを考えれば、やはり〝長足の進歩〟というべきでしょう。何よりも、今後、ますます問題となるであろう様々な動きーたとえば最近の子ども たちの国語力の低下と、それがもたらす漢字教育の転換の兆しなどに考えをめぐらせば、現状のままに推移する可能性は低いと思われますから、これからの石井方式の普及、発展の余地は大きいものがあるといえるでしょう。

さて、石井方式が〝ゼロからの出発〟をするさい、小路幼稚園をはじめ、大阪の幼稚園が、積極的な役割りを果たしたことはすでに述べました。

なぜ、大阪が中心となったのか。そしてなぜ、いまでもこの傾向は変わっていないのか。はっきりと石井方式を導入しているのが明らかな実践園は、大阪市内だけで二十園近くあり、大阪府下としてみても四十園にも及ぼうとしています。全国的にみても、東京や沖縄の実践園の数を上回り、ナンバーワンといわれています。ある東京都内の実践園の園長が、「大阪は、というより大阪人は、建前にとらわれない発想の柔軟さがあるし、〝実利〟を重んずるためか、子どもや父兄にとってプラスとなれば、果敢に行動に移す決断も速いからでは?」と語っていましたが、このあたりにその理由があるのかも知れません。

ところで、〝老舗〟の小路幼稚園ですが、大阪市生野区の、住宅と工場の入り混った、いわば下町に当たる場所にあります。昭和四十三年四月に石井方式を導入して以来、常に今日まで各地の実践園をリードして来ましたが、いまもその姿勢に変わりはありません。井上文克先生が石井先生の著書『私の漢字教室』（本巻第一巻所収）と『一年生でも新聞が読める』（同第2巻所収）を読んで、「これだ!」と確信し、すぐさま石井先生のもとへ飛んで行き、石井方式の採用を決定したいきさつは、本巻第3巻の冒頭に詳しいのですが、この井上先生の行動力、実行力は、幼児教育全般に著しい成果をあげています。全国三五〇余の幼稚園を会員とする知能教育幼稚園の会と、同じく九〇数園がメンバーである新幼児教育研究会の会長を務め、五十五年秋には、長年にわたる幼児の漢字教育に寄与した功績を

認められ、叙勲を受けたほどです。

昭和五十四年には、それまで石井先生の主宰する石井教育研究所と栃木県那須郡のすぎのこ幼稚園で、ごく例外的に行なわれていたといわれますが、一般の園児全員を対象として、全国で初めて漢文を本格的に読ませる試みに着手しました。論語から始め、現在では、唐詩も取り入れています。幼稚園の教室に入ると、壁一面に貼られている太い毛筆で書かれた漢詩、漢文がいやでも目につきます。下町のどこにでもいるような子どもたちが、目を輝かせて、大きな声で朗読する光景はまさに壮観。全く、子どもたちの能力はどこまで底深いものかと驚嘆させられます。反復する度に子どもたちは喜びの表情をみせ、記憶もまた一段と深くなります。問われれば説明しますが、漢文の意味にはこだわらず、まずは、リズミカルに楽しく「子曰く……」と子どもたちは元気よく朗読を続けます。

「大人が考えて、子どもには無理なものと決めつけるのは良くありません。子どもの能力は大人の想像する以上のものがあります。レベルを落とさず、大人と同じものを与えてもちゃんと受けとめてくれるのですから」これは井上先生の言葉ですが、子どもたちの持つ測り知れない能力を信じて、実践し続けて来た人だけが自信を持っていい得るものでしょう。

石井方式の導入当時、父兄、園内外の先生方から受けたいわれのない非難の数々は〝沈静化〟しつつあるとはいうものの、いまでも全くなくなったわけではありません。しかし、今後も「子どもに良いと思われるものはどんどん取り入れていきます」と、井上先生の信念はいささかも変わりはないのです。

大阪には、小路幼稚園とほぼ同時期に石井方式を採用した幼稚園が数園あります。たとえば、旭学園もその一つ。大阪市旭区の第一と寝屋川市の第二を合わせて、園児数一四〇〇人以上というマンモス幼稚園ですが、当時、井上文克先生の呼びかけに応えて、石井方式の導入に踏み切ったといいます。以来十五年、一貫して漢字学習を実践して来ました。漢字カード、漢字絵本、そして、希望者には俳句、百人一首を使ったりと、教材も様々です。近隣の幼稚園には、なかなか普及がむずかしいようですが、三年ほど前に、そういう園の先生方が見学に訪れたそうで、今後の動きが楽しみというところです。

マンモスといえば、昭和三十九年開園の天宗学園瓜破園（大阪市平野区瓜破西）もそうで、四十四年に同第二瓜破園（平野区瓜破東）、四十八年同長吉園（平野区長吉長原）、五十年同東住吉園（東住

吉区）と開園が続き、今では、総園児数九五〇人、先生も六〇名という大きな規模になっています。

ここでは、昭和五十年に四園が同時に、石井方式を採用しました。まず手始めに石井先生に直接来園してもらい、園児の父兄を集めて公開授業と講演を行なったそうですが、幸い、とくに強い反対意見は出なかったとのことです。

年中・年長組は漢字絵本を中心に、年少では、毎朝の集まりの時に、漢字カードを示していますが、子どもたちは興味深くそれに見入り、読み上げているそうです。やはり石井方式の採用前とくらべ、子どもたちが一様に読書好きになったといい、卒園して小学校に上がると、クラスのリーダー格になる子どもが目につくそうです。

天宗学園と同様、昭和五十年に採用したのが、大阪市東淀川区の瑞光幼稚園。こちらも第一と第二があって、園児数は合計約二〇〇名。この東淀川区内の幼稚園では、漢字学習に熱心な園が多く、区内に所在する十数園のうち、約半数が何らかの形でそれを取り入れているといわれます。

同じく大阪市内の城東区にある諏訪保育園の方針は、いわば〝自然体〟で、というもの。園児数二〇〇余名、九クラスのこの保育園で、石井方式を導入したのは昭和五十六年度からとかなり新しいのですが、園長の喜連川慈雨子先生によれば、キッカケは、石井先生のお話を聞き、その実験を見たため、といいます。初め、園の先生方には、実施はむずかしいという感想が多かったそうですが、「遊びのなかに漢字を取り入れる」という方針に則して、続けられています。喜連川先生は「いまの大人、とくに大学生を見ていますと、漢字を知らなさすぎるので、子どもたちの将来を考え、漢字アレルギーというのか、漢字はむずかしいものだという気持をなくしてあげたいと思ってやっていますが、無理強いは絶対にしない方針です。もちろん興味のある子はどんどん吸収してきますから、そういう子にはチャンスを与えてやりたいと考えています」と、肩ひじ張らないやり方を強調しています。

近年、都市化が急激に進んでいる東大阪市には、いくつかの実践園がありますが、最も早い時期から漢字学習に取り組んだのがフタバ学園（保育園）です。早期といっても、まだ三年前からなのですが、東大阪市内に三〇数園ある私立保育園の先陣を切ったわけで、近隣保育園へも少しずつその影響が広がりつつあるようです。同市内のさわらび保育園が、一年ほど遅れて石井方式を採用したのを始め、導入を検討しているところがいくつかあるといいます。

昭和五十七年に、例年二、三回ほど開かれる主任保母研修会という先生方の会合が、フタバ学園で

開催され、集まった先生方に、漢字の公開授業を見学してもらったところ、先生方は一様に子どもたちのすぐれた能力に驚き、「ぜひ自分の園でもやってみたい」と語っていたそうですから、今後、石井方式を実践するところが増える可能性は十分あると思われます。

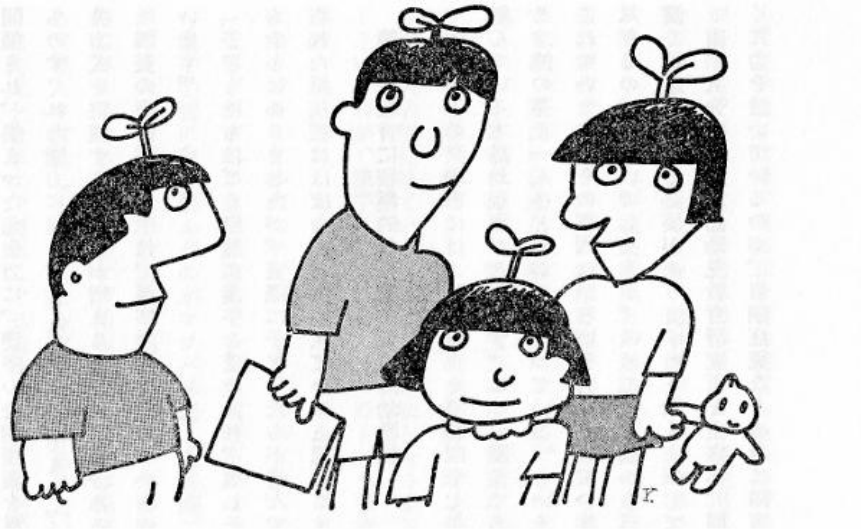
園長の小山高照先生は、漢字学習を始めてからの、子どもたちや父兄の様子について、こう語っています。

「子どもたちはごく自然に漢字を受け入れ、楽しそうに親しんでいます。父兄の皆さんからは、反対も少しはありましたが、実際に子どもたちが喜んで本を読んだりする姿をみて、それまで多少見受けられた抵抗感はほぼなくなって来ていると思います」

障害児教育に積極的な貝塚市の木島幼稚園

大阪府下の貝塚市には、漢字教育を昭和四十七年から採用し、一貫してユニークな幼児教育に取り組んでいる木島幼稚園があります。ここの園長である南宗久先生の持論は、子どもは「天才的に伸びる才能の芽を一人ひとりがみな持っている」というもの。そして、「小学生の〝落ちこぼれ〟が問題にされています。その原因はいろいろ討議されていますが、やはり幼児教育の不徹底、あるいは軽視に尽きるのではないでしょうか。改めてゼロ歳から三歳まで、また就学前幼児の教育のあり方について深く追求してみる必要があります」と強く主張しています。

南宗久先生は、木島幼児教育研究所を主宰し、同時に帝国女子大学の助教授でもあるのですが、とくに力を注いでいるのが、自閉症児など心身に障害のある子どもたちへの教育です。大阪府下の私立 幼稚園で、こういう子どもたちを受け入れているのはわずか五園、そのうち文字教育などによる障害児対策に取り組んでいるのは木島幼稚園だけであるといいます。たとえば、その成果などを、昭和五十八年六月十二日付の「読売新聞」泉州版に



載った記事で見ますとー。

「独自の指導 心開く障害児 『お母さん』と言えた――貝塚の木島幼稚園 全国から見学相次ぐ」という見出しとともに、精神障害や自閉症を中心にした三歳から五歳の園児十四人が通園していること、卒園と同時に小学校の普通学級への全員入学を目標にしており、五十八年三月卒園した四人が、そろって入学を果たした実績のあること、口を閉ざしたままでいた園児が初めて「お母さん」と呼んだケースーなどを紹介しています。

こうした子どもたちを受け入れ、幼児教育を実施していることについて、南先生は、木島幼児教育研究所が毎月発行している「育児資料」の第七号（昭和五十七年二月）に、次のように書いています。

「自閉症の子供でも一年しないうちに一時間坐って勉強出来るようになっていますし、現在、普通学級でりっぱに勉強している子供（IQ 一二五）もいます。脳障害の子供でも、〝頭〟の部分の漢字の読みを覚えて（二～三か月後）、はっきりと言うようになりました。普通学級へ行けるかどうかのボーダーラインにいる子供などは、少しの努力、知的刺激をして知能を向上させれば、楽々と普通学級へ行けるのに、就学前の知育はダメだという意見で、延び延びにさせているうち、養護学級へ行かなければならない年齢になり、その時では頭がかたくなって、大事な幼児教育の機会をのがしてしまうことになります」

「このようなことは、障害児だけの問題ではなく……優秀に生まれた子供でも、育て方、教育の方法が適切でないと、優秀に育つとは限りません。反対に、障害を持って生まれても、普通に、又それ以上に優秀に能力を伸ばすこともあります」

こうした、いわゆる障害児をも含め、約一七〇名の園児が、木島幼稚園に通園しています。漢字絵本、俳句カルタ、諺遊びなどを中心に、漢字学習が実施されていますが、みなそろって本好きになり、小学校へ上がっても、まず〝落ちこぼれ〟になる子どもは絶対にいないといいます。幼稚園ではそれほど学習の面では日立たなかったが、「小学校では勉強がラク」という子も多く、なかに「子どもができすぎてやりにくい」という小学校の先生の声すらあるほどだといいます。

「幼稚園では、遊ばせて、体を動かしていればいいというのは、まさに、〝動物教育〟ではないか」と強い口調で疑問を投じる南先生の方針は、今後もゆるぎなく実践されていくことでしょう。

活発な動きを見せる神戸市の実践園

大阪から兵庫県へ目を転じますと、何といっても、やはり神戸市が最もさかんに石井方式が実践されています。たとえば、灘区のあさひ幼稚園など、十数年の歴史を持っています。ここの幼稚園でユニークな点は、〝躾〟に重点を置く教育方針をとっていること。漢字も躾の話に関係した、姿勢、笑顔、挨拶などのカードを独自につくり、子どもたちに示しているそうです。また、子どもたちのなかには〝漢字博士〟とニックネームのつく子もいて、その習得率はすばらしいものがあるようです。あるいは、卒園生の通っている小学校の先生から「漢字力のある子どもは、すべての学科の成績が良いですね」と評価を受けたといいます。園長の高沢三子先生によると、近郊の幼稚園への普及活動もいろいろと試みてみましたが、まだ反対の声があって、なかなか石井方式の採用に踏み切れずにいるところが多く、「当園だけでもしばらくは努力し続けていきたい」ということです。

このほか、神戸市内では、ホザナ幼稚園、高羽幼稚園、平田幼稚園などが、石井方式の実践園として知られています。

洲本市では、サカエ保育幼児園が昭和五十三年ごろから漢字学習の実践を続けています。五十八年度現在で、六クラス、一四七名と平均的なスケールの幼稚園です。石井方式の採用当時、園児の父兄はびっくりし、教師の間にもためらいがあったようですが、いまは、みな落ち着いて取り組んでいるそうです。漢字学習を行なう機会のなかった園児の兄や姉よりも、園児はやはり国語力では一歩リードしているそうで、なかには親でも読めない漢字をスラスラと読んでしまう子どももあって、こうしたエピソードにはこと欠かない様子です。

2 〝新旧混在〟で活動を繰り広げる東海、紀伊地方

一宮市が最も多数を占める愛知県

大阪、兵庫に隣接する東海、紀伊半島地域における石井方式の実践園は、古くからのものと、比較的新しく、というところが混在しているようです。

愛知県では割合後者に属する実践園が多いと思われます。とくに一宮市にはこうした実践園が多く、

一〇か園近くがあります。たとえば千秋幼稚園、大和東幼稚園、丹陽幼稚園などは、いずれも昭和五十二、三年ごろから実践に乗り出しております。

千秋幼稚園の場合、初め、石井先生に来園してもらい、父兄にお話や公開授業を行なってもらったところ、父兄の側からは反発や苦情どころか、逆に「ぜひ石井方式を」との熱望があり、採用を決めたといいます。また、その熱心のほどは、もちろん父兄だけのものではありません。当時、全教師が直接石井先生の指導を仰ぎ、その後も、各教師とも年一回は自ら公開保育をするなど研修に務めていますし、石井教育研究会にも必ず毎年教師を参加させ、その教師は帰園して、他の教師へ伝達講習を行なうなど、教える側も勉強熱心な取り組みをしているのです。

昭相五十八年度の園児数二一〇余名。出生率の低下と相まって、全般的にどこでも園児数が減少しているにもかかわらず、中村正治園長は「石井方式を採用しているので、そうでない園にくらべて減り方が少ない」と述べていますが、これなど、石井方式に寄せる父兄の期待感の強さを表わしているものと思われます。同様に、中村先生の「卒園児は小学校で優秀な成績をおさめていますから、父兄のみなさんに感謝されています」という言葉に、父兄がなぜ期待する気持ちを持つのか、その要因がうかがわれるというものです。

同じく一宮市内にある小島幼稚園では、昭和五十五年から石井方式を採用しています。その前の年の九月に、石井先生から教師のみなさんが講義を受けるなどの準備をした上で踏み切りました。やはり子どもたちは新聞をよく読むようになったり、小学校の生徒よりもずっと漢字に興味を持って、テレビや街なかの看板類を見るようになったといい、また、子どもたちに全体的に集中力が出てきたことなどを、これまでの成果としてあげています。

〝わが道を行く〟名古屋市・牧野幼稚園

この地方で、最大の人口を持つ名古屋市は、意外に実践園が多くはありません。そのなかで、中村区にある牧野幼稚園は、漢字学習を昭和五十年代の初めから実施しており、現在、約一六〇人の園児がそれを行なっています。導入の直接のキッカケは、やはり園の先生方が石井先生の講演を聞いたことにあるといいます。そのあとすぐに、石井先生を園に招いて、父兄にも参加してもらい、公開授業と講演会を開き……とスピーディな展開を見せました。

ところで、一般的に、幼稚園と小学校との〝対話〟が少ないことが指摘されています。そのため、お互いの意志疎通に欠ける面がいささかあると思われるのですが、とくに石井方式の実践園とその近隣小学校との間には、漢字学習の扱いをめぐって密接な交流が必要となるにもかかわらず、現実にはなかなかそれが果たされていません。そのため、残念なことに、小学校が実践園に対して誤解を持つ傾向がまだあると見られています。

こういう風潮のなかで、この牧野幼稚園の所在する近辺を含む小学校の学区（牧野学区）では、隣接するもう一つの学区とともに、二つの学区内の小学校と幼稚園との懇談会が、年に一度ではありますが開かれているのです。小学校からは校長、教頭、それに一年生の教務主任クラスが、幼稚園は主事、主任クラスが各々出席するそうで、たとえば昭和五十八年の場合、二月に開催され、約三〇人が出席したとのこと。

話題はいろいろなことに及びましたが、漢字学習を実践する牧野幼稚園が出席するため、やはり「漢字」に話がふれざるを得ないようです。小学校からの意見として代表的なものは、〝あいうえお〟と〝漢字〟のバランスを取ってもらいたい」ということ――つまり、暗に小学校の〝歩調〟に合わせてもらいたいというほのめかしではないかと、牧野幼稚園では解釈しています。

卒園生が小学校へ上がると、その読書力、集中力などが、他園から来た子どもたちより高い、という評価が学校側にあるせいか、頭ごなしの漢字学習否定論は、さすがに見受けられないらしく、もっぱら子どもたちの間の〝バランス〟をどう取るか、という観点からの「漢字学習をさし控えられたい」という見解でしょう。

これに対し、中村区内二〇数園のなかの唯一の実践園である牧野幼稚園は、孤立しているといえばそうなのですが、いわば〝静観〟の構えで、あわてず騒がず、わが道を行くといったところ。

近郊幼稚園への石井方式の普及についても、努力をしていますが、なかなか思うようにいかないらしく、昭和五十七年の十月に催した公開保育のさいなど、百数十人の先生方が来園したそうですが、区内からは全く来なく、かえって名古屋市外や岐阜県、三重県といった他県からの、それも保育園関係の参会者が目についたほどといいます。

この牧野幼稚園では、漢字絵本を読み、漢字カルタを使ったお話づくり、といった遊びのほか、カを入れているのが、「貸出図書館」活動。一週間に二回、約三〇〇冊の本を子どもたちに開放している

そうですが、家庭へ持ち帰った子どもたちに、母親と一緒に読んでもらい、そして、母親に子どもたちの反応や感想をメモしてもらって、図書とともに返却させるという試みを行なっています。

こうして、子どもと親はもちろん、親と幼稚園とのコミュニケーションも計ろうとするわけです。

こんな活動が効を奏したのか、卒園まもない子どもたちの読書力について、石井先生が小学校四、五年生ぐらいの力を持っていると評したことがあるそうで、ますます意を強くし、この試みを継続発展させようとしているのです。

その他、名古屋市内で漢字学習に取り組んでいるところに、港区の善進保育園などがあります。全体として、愛知県では、保育園の関心が高まってきていると思われます。

さて、一宮市、名古屋市以外では、尾西市の尾西幼稚園が、昭和五十八年に採用したばかり。同年五月に、初めて石井先生の講演会、公開保育を催したのですが、そのさい、子どもたちが示した漢字に対する強い関心に、父兄からも漢字学習の実践に対して、大歓迎の声があがったといいますから、今後の活動が大いに楽しみといえます。

このほかに、愛知県では、西尾市、春日井市、豊橋市、稲沢市などに実践園が散在しており、岡崎市の本宿幼稚園は牧野幼稚園の分園として活発な実践を見せています。

〝古参実践園〟として知られる三重の清泉幼稚園、和歌山の紀伊保育園

三重県の津市には、昭和四十五年に石井方式の採用という〝古参〟の幼稚園――清泉幼稚園があります。最初の石井先生の来園、公開授業実施が四十三年だったといいますから、石井方式への関心は、かなり以前からあったものです。

採用の動機は「園長が国語漢文学の専攻であったため、漢字に関心が強く、幼児の漢字教育の重要性を感じていたから」としていますが、「当園では漢字遊びを嫌う子はほとんどいません」と、一七〇名近い園児たちにとっても大いにプラスになったようで、また、卒園児が小学校で示す漢字の読み書きの力に、小学校の先生方も喜び、かつ驚いていると報告しています。

これに負けず劣らず古くから導入しているのは、和歌山市の紀伊保育園。子どもたちの集中力、思考力を養う上に最適と考え、昭和四十八年から実践し始め、当初の意図通り、意欲的に子どもたちが取り組んでいると、評価しています。園児数六〇名余りの〝小粒〟な幼稚園のため、四、五歳児混合

のクラス編成をしていて、四、五歳児とも同じ漢字絵本を使って、同じように遊んだり、読んだりしているそうです。

3 石川は「かわい」、富山では「かたかご」が〝核〟として

甲信越へ行くと、石川県と富山県の〝奮闘〟ぶりが大いに注目を浴びています。

両県には、地域の〝核〟ともいうべき実践園――石川のかわい幼稚園、富山のかたかご幼稚園――が存在し、石井方式の実践、普及拡大に情熱を持って取り組み、その活躍は今後も強い期待をかけられているといえましょう。

漢字学習十五年の実績を誇るかわい幼稚園

かわい幼稚園は、金沢市内に、かわい、第二かわい、伏見かわい、みどりかわいの四つの幼稚園を持ち、さらに分園ともいうべき富山市の富山かわい幼稚園を合わせれば、園児数は一一〇〇名近くになります。昭和二十七年に泉本町幼児園として発足し、四十二年、かわい幼稚園に名称変更、四十四年からいよいよ漢字学習の採用に踏み切りました。

さて、かわい幼稚園で、漢字学習を導入する際に、主唱者であったのが、現在、同学園の主事をしている山川稔先生です。その当時のいきさつについては、山田先生の自著『幼児は漢字が大好きだ』（登龍館発行）のあとがきに詳しいのですが、それを要約すると、こんな風になります。

昭和四十三年、園児数が三〇〇名から五〇〇名余りへと増えたころ、どうしたら幼稚園の運営をうまくやっていくかについて、あちこちの幼稚園を訪問して意見を聞いていたが、ちょっとある園で漢字を取り入れていると聞き、訪ねたのが、大阪・寝屋川市の旭学園（本書二六五頁参照）であった。

教室の至るところに漢字カードが貼ってあり、度肝を抜かれた。いったい、幼児たちは本当に漢字を覚えるのかと疑心暗鬼であったが、園長の下牧重幸先生にいろいろとお話を聞いた。このことを理事長に報告すると、「それはすばらしい教育だ」と大いに賛意を示し、さっそく〝本場〟大阪へ先生方全員で見学に行った。小路幼稚園、文化幼稚園など何か所かを分散して見学し、帰ってから、全員で持ってきた資料や見学してきた内容を検討、「これはいけるのでは」という感触を得たのである。そしてその年（四十四年）の四月より、本格的な漢字学習に入った。最初は恐る恐る、また先生方も無我

夢中であったろう、と。

初めて園児の父兄を集めて行なった公開授業のさいに覚えた緊張感を、いまもありありと思い起こせると、山田先生はいいます。しかし、意外なくらい、父兄からの苦情や反対はなく、続けて催した石井先生の講演会にも、とくにお母さん方の関心は強く、たくさんの方が出席し、お話を熱心に聞き、質問もかなり出たといいます。

事実、漢字学習を実践し始めて三年経過した時点に、山田先生が園児の親に試みた〝漢字教育についてのアンケート〟の結果をみても、それが裏書きされたことがよくわかります。これは、一三八名を対象に「賛成、反対」の意見などを聞いたものですが、結果は、賛成一〇四名、反対九名、残りの二五名は〝わからない〟という、極めて好意的なものでした。

そこで、実践園の先生方はもちろん、これから、子どもと漢学遊びを行なおうとしているお母さん方にとっても参考になると思われますので、このアンケートに表われた親の意見を少し紹介してみましょう。

まず賛成意見としては次のようなものがありました。

○これまでは、本を読んでいても漢字に出会うと投げ出してしまったが、いまでは質問して読もうとする態度が現われ、読書に興味を持つようになった。

○具体的なものや絵により漢字を理解させることは、無理がないから良い。

○漢字はひらがなよりもやさしく早く覚えられるものだ、ということがわかった。

○好奇心の強い年ごろであるから、覚える覚えないにかかわらず、漢字に接する機会を多く与えることは良いと思う。

○漢字を覚えることにより、文を読み取る力が養われ、知識が高まるので良い。

○新聞、ポスター、テレビなどから読める字を見つけて、喜んで読んでいる。

○小学校に入ってから急に学習するよりも、今から自然に漢字に慣れさせておくほうが良い。

○親が覚えさせようとしなくても、子どもは漢字を喜んで知ろうとし、覚える。

○街に出ても、看板やポスターやコマーシャルなどの字句を読み、それがとても楽しそうである。

一方、反対というよりも、親として抱く心配の念として、次のような意見が出されました。

○漢字を知っているということで、小学校に入ってから、学習する熱意を失いやすいのではないか。

○ 漢字を教えようとすることで、かえって漢字嫌いの子どもにする恐れはないか。

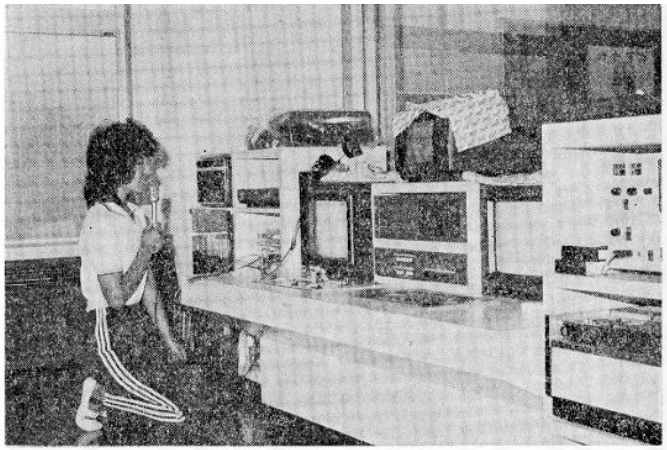
○ 漢字が読めるために、頭でっかちの子どもになる心配はないか。

いずれも初めて漢字学習と出会った親としては、もっともな心配であるかも知れません。が、これらがまず取り越し苦労であることは、石井勲先生の様々に語られている所説を知り、実践園での実際指導とその成果とを見れば明らかとなるでしょう。

このほか、そのアンケートに寄せられた意見のうちには、親の希望として、子どもの負担にならない程度に、日常生活のなかで自然に漢字に慣れるよう楽しい学習をして欲しいとか、小学校に就学したさい、漢字学習を受けなかった子どもをバカにすることのないような教育をしてほしいというような〝注文〟がありました。

現在でも、石井方式を全く知らない人がその実践を初めて見聞きした時など、こうした意見、要望が出ることは珍しくありませんが、いずれも実践のなかで、完全にぬぐい去られていくもの。だからこそ、数多くの父兄から石井方式は支持され、その賛同者が増えてきているのです。

ところでこのかわい幼稚園の漢字学習――漢字カード、漢字絵本、漢字カルタなどを使った〝オーソドックス〟なものはもちろんですが、大変ユニークなのが、テレビビデオ放送を駆使した学習でしょう。昭和四十六年当時から、早くもビデオ放送設備を導入、文字絵本などをビデオ化し、各教室に設置したテレビを通して子どもたちに見せ、楽しく遊び、学習する体制を整えています。これらのビデオは、台本を始め、制作はすべて、園の先生方が自ら担当し、すでに数十本の作品がストックされています。


かわい学園自慢のテレビビデオ・システム

かわい幼稚園ではまた、研究活動が極めて熱心に行なわれています。「保育の手引き」という先生方のための参考書から、子どもたちにどうしたら効果的に楽しく様々な学習、遊びを施せるのかをまとめた「よい子の文字あそび」「よい子の歌曲集」「体育あそび」「よい子のトレーニング」など

が、その成果となって文献としてまとめられています。

さて、金沢市内には、このほかに昭和五十八年度に開園したばかりの新しい幼稚園、慶応幼稚園も、開園早々から漢字学習を取り入れ、五クラス、一二五人の園児が楽しく漢字で遊んでおります。金沢市には約四〇の幼稚園があるものの、いまのところ、石井方式を採用しているのは、数園にとどまっています。ただし、導入を検討している幼稚園もいくつかあるそうですから、これから少しずつ増えていく可能性はあるものと思われます。

対象を石川県下に移しますと、河北郡七塚町にある木津幼稚園もかなり以前から石井方式を実践していて、昭和四十九年に、幼児期における能力開発を日ざして導入に踏み切りました。父兄には、反発どころか、かなり好評を持たれてスタートできたといいます。

「採用当初は教師も父兄も感動し、子どもたちの教育効果は絶大なものがありました」と園長の星名紀之先生はその当時のことを語っています。現在では、俳句遊びなども含めた漢字学習を、約九〇名の園児が、日々楽しく実践中というわけです。

富山の〝先覚者〟かたかご幼稚園―文部省研究指定校として

石川県のお隣り、富山県では〝核〟となって漢字教育の実践活動を担っているのは、何といっても真岡市伏木古国府にある、かたかご幼稚園といえます。富山県教育委員会の研究委託校として、あるいは文部省の指定校として、文字教育の実践研究に当たるなど、昭和四十七年度に石井方式を導入以来、常に県下の幼稚園をリードして来ました。

最近では、十四基のパソコンを導入し、一人ひとりの能力の段階を診断、そのカルテを作成して、個人個人の能力に応じたプログラム学習を始めています。そして、一日に園児一人当たり四、五分は必ずコンピュータを操作させることで、とくに〝数の認識〟をする能力の向上に務めているわけです。これは、漢字学習とともに、子どもたちの基礎能力の向上を図ろうとするものといえます。

ここで、かたかご幼稚園の京谷準一園長が、漢字学習に取り組むキッカケになったことを、自ら紹介している一文（「母と子の新聞」昭和五十七年五月十五日号）がありますので、それを披露してみましょう。

「『かたかご』とは、万葉集の編者・大伴家持が越中国司として在任中詠んだ歌から取った名で、毎年四月中旬頃、可憐な花を咲かせる『かたくり』のこと。昭和四十六年四月、万葉ゆかりの越中国庁北高台に開設したのが当園である。翌四十七年、県下五十余の私立幼稚園の先陣として、県教委の研究委託を受けて〝幼児の文字に対する興味と関心〟というテーマで実践研究を始めたのが、そもそも漢字教育との出会いである。ついで昭和四十八年、四十九年の両年度にわたって、文部省の研究委託校として、同じテーマで漢字教育を実践、研究し、五十年三月、石井勲 先生を講師にお招きして、研究発表会を開いた。以後、今日まで毎年のように石井先生のご来園を願い、漢字教育は当園の教育の一つの柱となっている」

文中に出てくる、文部省の研究委託の成果については、主題「幼児の言語生活の中で、文字に関する興味や関心および能力がどのように発達するか」として、昭和五十年の三月に研究発表要項がまとめられています。この研究結果によれば、石井先生が年来主張している様々な要点が、客観的にみごとに裏づけられていることがわかります。全部を紹介する余裕がありませんので、研究実験方法、研究の過程で明らかにされたこと、その成果などをいくつか示してみましょう。

研究は、昭和四十八、九年度の二年間にわたり、二年保育の年中・年長組、三年保育の年中・年長組の総計二百数十名に対して行なわれました。

方法としては、漢字、ひらがな、カタカナに数多く親しみ慣れさせるため、保育室を中心とする園内の環境づくりを工夫し、各領域を通じて保育のなかにさりげなく文字を提示する指導法を研究実施して、文字の自然習得をねらった運動遊びやゲームを考案しました。さらに、子どもに提示する文字として、どんなものが適当であるか、年限別に試案を作成するなど、細部にわたってツメを行ないました。そして、もうひとつ重要なこと、つまり家庭における文字のあり方について、文字に関する興味や関心を高める家庭の環境づくりを求めました。とくに保護者の理解を深めるため、懇談会、家庭訪問、家庭教育学級などのあらゆる機会をとらえ、さらに諸アンケート調査を通じて、文字指導に対する従来の誤った考え方の是正にも務めたわけです。

こうした二年間の研究経過を踏まえて、一定の結論が導き出されましたが、次に、そのプロセスのなかで明らかにされたこと、研究の成果などを研究発表要項から箇条書きにして提示してみます。

※研究の過程において、明らかにされたこと

(1) 子どもは文字の読めることに興味を覚えて、さかんに他の文字を読もうとつとめ、次には書こうとする。この時期は、筆順や字形がでたらめであるが、これを是正することをあせりすぎると、子どもは反抗心をおこし、それが文字習得への抵抗となり、逆効果となって現われることがある。

(2) 子どもの文字に対する興味や関心及び能力の発達は、必ずしも知能指数に比例するとは考えられず、家庭環境や性格によることが多いと考えられる。

(3) 絵本や童話などが、身の回りに豊かな環境に育っている子どもは、文字に対する関心や興味が深く、その能力も高い。

(4) 漢字の読みについては、字画の多少に関係なく、子どもの生活との親密度、具象性によって左右されることがまことに大きい。

(5) テレビをよく見ている子どもは、必ずしも文字を読む能力がすぐれていることにはならない。

(6) 当初から、ひらがな、カタカナ、漢字を、順序にとらわれず提示していたが、漢字の習得は他に比べて非常に速く、氏名などの弁別についても、子どもにとっては漢字の方が能率的である。

※研究の成果について

(1) 漸次文字に慣れ、名前などの弁別速度も速くなり、文字に対する抵抗感らしいものはほとんど見られなくなった。

(2) 絵本や読み物について、従来、絵の多いものを喜び、文字の入っているものを避けていた子どもが、逆に文字のあるものを好んで選ぶようになった。

(3) また、地域の図書館へ巡回文庫の図書を借りる子どもが増え、本の選択なども他人にまかせず、自分で選ぶものが多い。

(4) カルタ取りなどの文字による遊びを喜び、これらの遊びから読字力を身につける習慣を育成できた。

(5) 漢字の読解力の習得によって、かなだけの文章より、漢字かな混りの文章の方が読みやすいとして、これを選ぶため、子どもの年齢にくらべて、比較的程度の高いものを進んで読む傾向が見られるようになった。

(6) 図書室や地域図書館、あるいは巡回貸出文庫から、文字入りの絵本や小学校低中学年向きの童話、

伝記などを借りて読む子どもがだんだん多くなって来た。

(7) 「文字への関心と理解に関する調査」（国語教育研究所案）を四回にわたって実施した結果、成果として次の諸点が現われている。

イ 「この字何と読むの」というたぐいの質問をする子どもが多くなった。

ロ 町の立看板やポスター、また新聞やテレビに表われた文字に、積極的関心を示す子どもが多くなった。

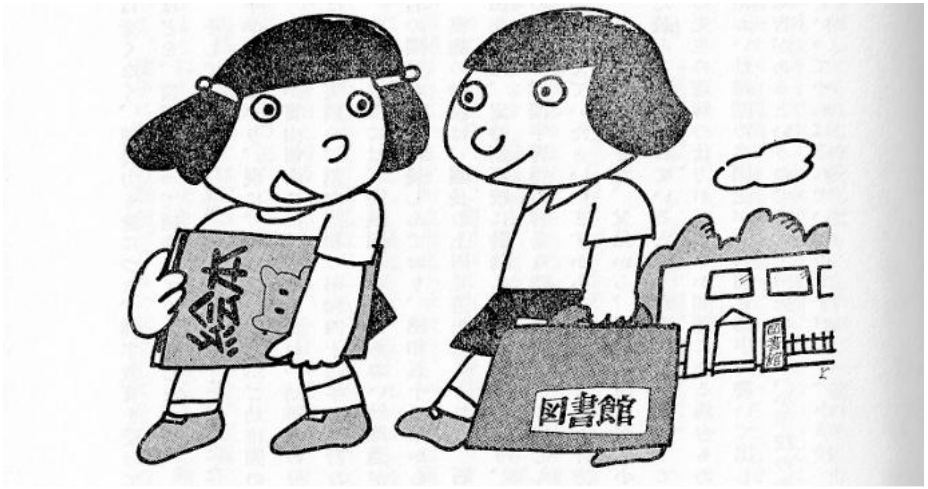
ハ 絵本に書いてある文章を音読する子どもが増えて来た。

ニ 字に対する関心が強く、なんでもともかく読もうとする態度を身につけた子どもが多くなった。

ホ 本を与えても「読んでくれ」というのではなく、自分で読むようになった。

(8) 読字能力の開発についての両親の態度は、自然習得の趣旨を良く理解するようになり、いわゆる教育ママ、あるいは〝漢字ママ〟といわれるような強制的、一方的指導の形を取るものはほとんど見られないようになった。

こうした研究成果に基づいて、漢字学習の積み重ねがなされてきた結果、園長の京谷先生によれば、



「本園の漢字教育が、広く認められるようになり、今では、子どもたちの漢字に対する抵抗感は全くなく、読書力も身につき、漢字教育を受けて悪かったという父兄の声は皆無」と、その成果のほどを、自信を持って紹介してくれました。

そして、こうした成果が知られるようになったためか、とくに昭和五十五年以来、近郊の幼稚園に漢字学習が広がり、現に、実施園はかたかご幼稚園のほか九園を数えるようになったともいっています。

このほか富山市内には、金沢のかわい幼稚園の分園である富山かわい幼稚園が、石川県の本園とほぼ同様な実践を、創立当初の昭和四十四年から行なっています。また射水郡には、実践園として、あおい幼稚園があります。第一、第二、第三の三園で、約四五〇名の園児が漢字に親しんでおり、昭和五十五年か

ら一せいにスタートしました。

実施の動機は、園長の上田晃道先生によれば、石井先生の講演を聞いてからといいますが、実は上田先生は、定時制高校に勤務していた経験があり、そこでの生徒の国語力の乏しさを痛感していたとのことで、漢字習得の容易な時期から漢字に親しんでいれば、そういうことも避けられるであろうと、当時考えていたといいますから、これもまた石井方式導入の要因の背景になっていたわけでしょう。

上田先生は、また、父兄から、四、五歳児が、小学校二、三年生の兄や姉より漢字をよく読め、また読み方を聞かれているといった声が届くといっていますが、同時に、小学校へ上がると、その学校の先生の理解の仕方がいささか問題になる場合もあるといいます。たとえば、一年生の作文の時間にあおい幼稚園の卒園生が、名前を漢字で書いて出したら、ひらがなに直されてもどってきた、などの報告があるというのです。上田先生は、「小学校の先生は、子どもが漢字で書いたら『よく書けるね』といってやればそれでいいのですが……。小学校へ行って先生方と話し合ったこともあります。よく理解してくれる校長先生もいますが、一般の先生方のなかには、気にする人がありますね」といささか残念そうです。小学校との連携、協力については、このあおい幼稚園の経験に限らず、一般的に、解決すべき課題がまだまだ残っているということでしょう。

4 〝発展途上〟にある中国、四国他方

中国、四国地方に目を向けますと、ここは、たとえば近畿、九州などにくらべて、少々実践園は〝手薄〟の観があります。もちろん石井方式の採用を検討中のところも多々あると聞いていますから、手薄というより〝発展途上〟といった方が正確かも知れません。

さて、島根県には、斐川町に出東幼稚園があります。本書のⅢ「漢字を学ぼう」で詳細にその記録が展開されています町立出東小学校の、いわば付属幼稚園の形で存在しているのですが、昭和三十四年に 出東幼児学級として開設され、三十九年から出東幼稚園として発足しました。

昭和五十八年度で園児数六十二名、二クラスという小ぢんまりした幼稚園。石井方式は、五十一年、小学校の採用と同時に導入され、今日に至っています。園長は、小学校の校長と兼務で、現在、中間幸夫先生がその任についています。

実践方法としては、当初から、壁、時計、黒板、さらに園歌まで、目につくものはすべて漢字で示

すようにし、板書もできる限り漢字で書くように務め、その他、漢字絵本、カード、漢字表などを使って、漢字に親しむ環境づくりに尽力してきたとのことです。

子どもたちのなかでも、とくに、出東小学校に在校する兄や姉を持つ園児は、漢字に対する興味がよりいっそう深まっているようで、自分たちから「漢字の勉強するか」といって自由な取り組みを進んで行なっているといいますから、ここでは、小学校と一体となった漢字への対応が十分に図れるすばらしい利点に恵まれているといえるでしょう。

広島は、中国地方のなかでも、比較的実践園の多い県といえます。そのなかで、たとえば広島市内の恵心幼稚園は、昭和五十一年から、石井先生の講習を受けたのち、漢字学習を取り入れました。父兄からは、最初〝英才教育〟のようだと、多少の反発があったそうです。この英才教育のようであるという誤解は、他園でも導入時に父兄の声として出てくる場合があるようですが、小さい子どもに何やら文字を教え込むという詰め込み式教育で、果たして子どもたちが喜々として取り組むことなどあり得ましょうか。これはまさに、石井先生がいつも説いているように〝適時教育〟であって、漢字を吸収するに最もふさわしい時期に合わせて、それを子どもたちに示しているだけのことです。しかも、子どもたちは、これまで、数多くの実践園の経験が明らかにしてきましたように、大変強い関心を持って、驚くほどの吸収力を見せ、漢字に親しんでいます。

前にも書いたように、実際に、子どもたちがどんな風に漢字に対応しているかを見聞きすれば、一挙に氷解する誤解といえます。ですから〝百聞〟も〝一見〟もしていない状態での思い違いそのものを否定せずに、理解を求める行為は繰り返し続けていかなければならないでしょう。

恵心幼稚園では、教材として、漢字絵本を中心に、その他、歌なども歌詞は務めて漢字で表わし、子どもたちの目に触れるもので、漢字を使用できるものはなるべく漢字カードにして、貼り出すようにしています。子どもたちの漢字への関心も高まり、一様に読書に対する抵抗感が失せ、園の外で、子どもらが漢字を読みあげたりすると、しばしば小学校の何年生かと聞かれることがあるといいます。

広島市以外では、安芸郡海田町の東海田幼稚園が熱心な実践園として知られています。園長の京極恵海先生によれば、すでに十年余り前から漢字学習を開始したそうです。知人に、石井先生の書いた『一年生でも新聞が読める』をすすめられ、それを読んでから、大阪の小路幼稚園の井上文克園長にアドバイスを受け、本格的に始めるようになったといいます。当初、父兄は石井先生のお話を聞いて

もらったりして、すぐ納得したのですが、逆に園の先生方は、しりごみをしたとのことです。もちろん、実践を始めてからすぐにその消極性はなくなりましたが。今後は、もう少し、研修、研究活動を活発にして、質の高い漢字教育にしたいと、京極先生はつけ加えていました。

四国には、はっきりとわかっている実践園の数は、それほどありません。山口、香川、愛媛の各県に数園といったところのようです。

そのなかの一つ、愛媛県松山市には、愛光幼稚舎が、比較的以前 から石井方式を採用して来ました。園長の河原次瞭先生によりますと、昭和四十九年に、石井先生との出会いがあり、その時から石井方式の研究を始めたといいます。当初、約六〇名の園児に試験的に石井方式を実施し、翌五十年から本格的に開始、現在では、約三五〇名の園児が漢字に取り組んでいます。

河原先生は、この石井方式を、知能を刺激する有効な方法として、また言語教育の充実を図るに最適な方法ととらえているそうで、初期の試験的指導のさい、二歳児に、一回五十分、週二回の指導を十か月続けて、漢字を四百から五百字、完全に覚えさせることができたといい、その効果のほどを裏付けたものとして語っていました。

現在では、漢字絵本から、漢字を七、八字選んで、それを一週間分として、クラス全員にそのカードを渡して学習させる方法を取っているそうです。また、二週間に一度は、土曜日研究授業を開き、先生方の指導技術の向上を図っています。

河原先生は、「まだまだもの足りない感じがします。いっそう理論的にも実践的にも充実させるとともに、近隣への普及活動にも力を注ぎたい」と意欲満々でした。

5 福岡を中心に進展著しい九州の実践園

九州地方での〝核〟は何といっても福岡県といえます。そして、二十か園近くを擁する福岡県を先頭に、佐賀、長崎、熊本、大分、鹿児島と、各々数園の石井方式実践園があり、年を追うごとに、その数も増加傾向にあります。

保育園で実践に熱の入る福岡県

さて〝先進県〟の福岡では、全国の傾向とは少々違った特色があります。それは、保育園における

石井方式の実践が盛んなことです。おそらく県内実践園の約半数が保育園と思われますが、これは後に出て来る茨城県などを除けば、他県では、幼稚園が多くを占めていることにくらべて、きわだった特徴といえるでしょう。

なかでも熱心な福岡市内の屋形原保育園では、昭和五十四年の後半から石井方式を取り入れています。理事長の木原文人先生によりますと、導入の直接的なキッカケは、石井先生の著作を読んだためといい、さっそく、園児たちのゲタ箱に、ひらがなを使わず、漢字で名前を記入したところ、園児はひらがなよりずっと早く名前を覚え、はき物の間違いなどがグンと減ったとのこと。これらのことで意を強くし、本格的採用を決心したといいます。導入を推し進めた木原先生は当初のことを、次のように話しています。

「私が先頭に立って先生方を説得しました。そのころ、当園では、比較的、新しい若い先生方が大半で、漢字学習については、いわばシロウトだったわけですが、逆に〝旧観念〟が薄かったためもあって、わりとすんなり取り組むようになりました。また、園児の親に、小学校から大学まで学校の先生が多く、教育熱心であったことも幸いしまして、漢字のことで苦情をいわれることは、ほぼなかったわけです」

二歳児から三歳児までは、主としてフラッシュカード（大きめの漢字カード）を使い、四、五歳になると漢字絵本を用いて指導していますが、なかに、二歳にして、宮沢賢治の詩を読みあげる子どもがいるそうです。卒園児の追跡調査はとくに試みていませんが、保育園では全く目立たなかった子が、小学校へ上がると、成績が極めて良い生徒となる例もあって、今では、地域からも十分認められ、行政機関の反対もないということです。

屋形原保育園はまた、市内の実践保育園のなかで最古参ということもあってか、近隣保育園への普及活動にも力を入れています。昭和五十七年の二月には、公開保育を行ない、多くの関係者が集まりました。これらが実ったのか、現在では、福岡市の実践保育園は十か園近くになったといいます。市内の保育園総数は民間が約一三〇か所、公立が二七、八か所で、公立で石井方式を採用する園はなく、すべての実践園は民間経営のところであるということです。

木原先生は、今後の抱負について、「地域的には福岡市内に限らずもう少し遠方にも働きかけを行ないたい。また、今までの実践活動をより定着させ、職員の質の向上、できれば専門家を育てる研修な

どに力を注いでいきたいですね」と語っていました。

同じく福岡市内の保育園で、昭和五十六年度から漢字学習を進めているのが成徳保育園。五十三年開園といいますから、園自体も新しく、現在およそ一五〇人の園児が楽しく、フラッシュカードや漢字絵本に取り組んでいます。

「単に子どもを預り保育するだけではどうか、と疑問を持ったのが、石井方式を採用する伏線になっていたと思います。最初は、それほどまでしなくても、と反対の声がありました。でもいまでは、父兄の方からは、喜んで期待する声が高まってきています」

これは、園長の青柳ヨシ子先生の言葉です。ここでもまた、やってみたら、当初とは全く逆の反応が表われたというケースでしょう。園児たちは、さらに「漢字を覚えると同時に、それから先のものにも興味を持つようになった」といいますから、大人の心配（？）をヨソに、すこやかに伸び伸びと成長していく姿が見て取れるというものです。

一方、福岡における幼稚園はどうかといいますと、もちろん、保育園に追いつけとばかりに発展を見せています。

昭和四十八年導入と、〝古手〟の部類に入る福岡市内の城南幼稚園は、約四百名の園児が漢字と親しんでおりますし、五十八年採用の、全く新しい席田（むしろだ）幼稚園も、姉妹園の月隈幼稚園ともども熱心に実践活動を繰り広げています。

ちなみに、席田幼稚園の小桶井トミ子園長はこう語っています。

「石井方式そのものは、十年くらい前から知っておりました。いつか実践してみたいと思い続けていましたが、つい最近、石井先生が公開授業のため福岡に来られ、それを見て、決心した次第です。やはり、園児たちには、日常生活のなかで、〝本物〟の授業として、知能を開発向上させてやりたいものです。思考力を伸ばすという意味でも漢字学習は最適でしょうし。

最初は父兄から反対の声があがりました。〝子どもに漢字を教えるなんてやりすぎだ〟という理由が多かったと記憶しています。けれども、石井先生に今年（五十八年）五月、来園していただき、公開授業を行ないましたが、それを見た方は心から納得してくれたようです。

漢字絵本を使ったり、いろいろな場所に漢字で書いた貼り紙をしたり、良くできた子にはシールをノートに貼ってやったりと、工夫をしていますが、子どもたちは恥ずかしがらずに声を出して絵本を

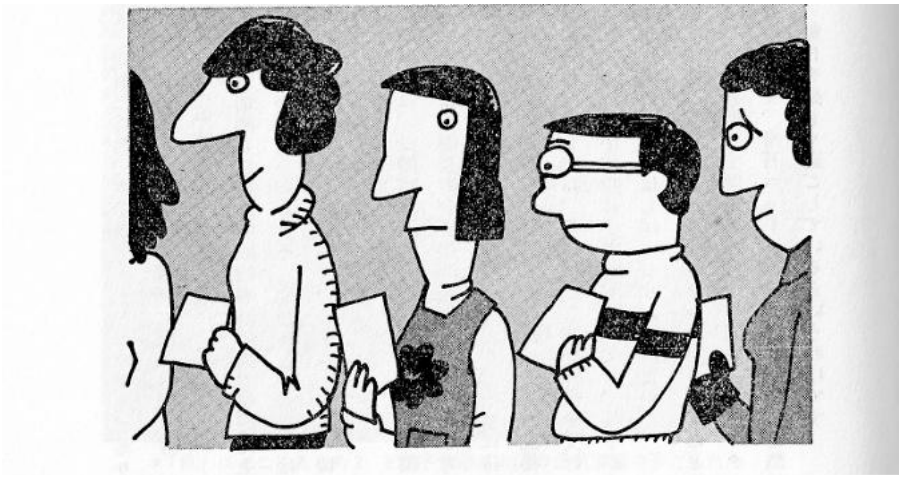
読むし、文中の接続詞や句読点にも気を配るようになりました」

福岡市内には幼稚園が約一八〇ありますが、石井方式導入に踏み切れずにためらっている園もいくつかあるそうです。そのなかで、昭和四十八年開園以来十年余、漢字学習の採用を考えつつ、ついに決心し、導入に踏み切った席田幼稚園の小桶井先生のこうした感想は、現在、採用に迷いを感じている幼稚園の先生方へ、大きな刺激となるのではないでしょうか。

大分はやまばと幼稚園、長崎では滑石中央幼稚園が中心

大分県大分市のやまばと幼稚園は、同県内で最も早くから漢字教育に力を注いできました。早くから、といっても五十四年度からですが、その後の進捗状況には著しいものがあり、園内外の評価も高く、すでに数園がやまばと幼稚園に習って実践園として産ぶ声をあげるに至っています。

とくに、園長の矢野一也先生の情熱はずばぬけ、自ら〝石井方式に心酔〟というほど、熱心な推進者として知られています。そこで、「母と子の新聞」に寄せた、矢野先生の熱のこもった一文を紹介することにしましょう。



「本園では毎年十一月一日に新入園児募集をします。入園は受付け順です。募集についての宣伝広告は一切しません。例年、夜明けから受付け時刻二時間ぐらい前に来ないと、入園順位がとれません。今年も百名補充募集をしましたところ、前夜半の十一時から朝五時までに並んだ人しか入園順位がとれませんでした。あきらめて帰った人々を除いて、ぜひ何とかしてと言う人々を数十名もお断わりし、気の毒なことをしました。

大分市では公立私立とも定員不足現象が昨年より目立ち始めているのに、本園では逆現象なのです。その理由のひとつは、三年前より始めた石井式漢字教育のすばらしい成果が認識されたことにあります。これは断言できます。たとえば、十一月に実施した漢字教育公開研究会には、県内

より二百名のお母さん方が来園されたのには驚きました。

私は学校長を停年退職後、幼稚園長となり、多年心酔してきたものの、公立校では実行できなかった石井先生の漢字教育をとりあげて、先生の指導の下に全職員で踏み切ったことに大きな満足を感じております。

漢字教育は単なる知識教育ではないことは当然ですが、この教育に付随して多方面にわたる顕著な効果が認められます。大脳刺激による知的訓練は子どもの理解力を高め、集中力を深め、読書意欲を強化し正しい行動力を養成します。

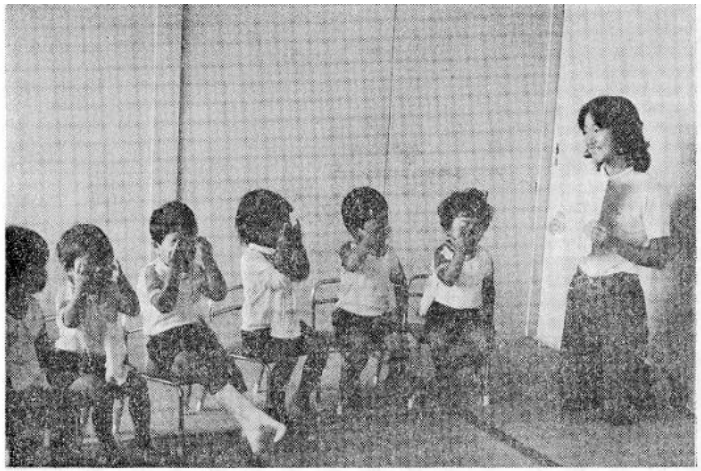
本園では四月から十二月までは裸の生活で毎日の乾布摩擦とお山の駆け足で、他にみられないスパルタ教育を継続して体力増進に努めていますが、漢字教育の併用によって、躾の面も力強く向上しております。

五十七年度中には恐らく県内にも志を同じくする園が実現するであろうと思いますが、私は姉妹園として、手を組んで協力したいと念願しております。定員二百名、六千平方メートルの敷地があり、自然の山をとり入れた閑静な環境の、中規模園ですが、来園の方は緑の多い環境に感歎されます。今後とも石井先生始め、先輩園の御指導をお願い致します」（五十七年三月十五日号）

こうした情熱を注いだ実践指導の結果、矢野先生は「子どもたちは、一様に読書好きとなり、集中力、理解力が向上し、およそ〝非行〟というものはみられません。さらに、本園の卒業生の七割は、小学校で優秀児ランクを占めていますね」といい切るほど、すばらしい成果をあげていると強調しています。

長崎県では、長崎市滑石の滑石中央幼稚園が、昭和五十六年九月から石井方式を取り入れています。採用の理由は、園長の金子達洋先生のかねてから考えていたことが、石井先生の考えと相通じるものがあったためということです。けれども、当初には、父兄からの反発がかなりあり、石井先生に来園してもらっての講演、公開保育その他、再三の説得によって多数の支持を集めることができたそうです。もちろんいまでは、各方面から高い評価を受けているのはいうまでもありません。とくに卒園児の父兄からは「小学校に子どもが入っても、漢字が大好きで、本当に漢字教育をやっていただいてよかった」との声をしばしばもらうといいます。

漢字絵本、漢字諺カルタ、フラッシュカードなどを使い、黒板その他に書く文字はすべて漢字。広



「目」はどこにあるの？ と漢字で遊ぶ太陽の子保育園の子どもたち

広とした幼稚園の玄関ホールにある園児読書コーナーでは、漢字絵本が最も子どもの人気を集めているとのことで、滑石ニュータウン内の、豊かな自然に囲まれた環境のなかで、三四〇名の子どもたちは、毎日を楽しく過ごしているというわけです。

福岡に次ぐ〝先進県〟鹿児島

鹿児島は九州では福岡に次いで実践園の多いところ。ここはまた、福岡に似て、保育園での漢字教育もさかんです。たとえば曽於郡には二つの保育園で漢字学習が行なわれています。その一つ、太陽の子保育園は、昭和五十三年から石井方式の実践を始めています。その年の四月に、大阪・小路幼稚園の漢字学習を見学したのが、直接のキッカケといいます。そのせいか、教材には漢字絵本、フラッシュカードの他、小路幼稚園と同様、最近では論語や唐詩なども取り上げているそうです。最初のころあった父兄や教師の側の反発ー漢字よりかなが先、何も園児にそこまでしなくてもーーもなくなり、絵本や普通の本に興味を示し、時に、親の知らない漢字を読みあげたりする子どもの姿に、今では誰でもが理解を示してくれています。「子どもの顔付きがしまってくる」といった父兄の感想もあるほどです。

曽於郡のもう一つの実践保育園は通山保育園です。石井方式採用は昭和五十七年と新しいのですが、幼児の父兄が抱いていた〝半信半疑〟も早やなくなって、成長するわが子の姿を見るにつけ、ますます理解を深めて来ており、一方、先生方も、子どもの示す能力の高さに驚き「やればできるのだ」ということを改めて確認できたと、園長の横峯吉文先生は述べています。

指導方法は、漢字カードを毎日の日課の中に組み入れ、一週間で十二~十四枚程度のペースで進め、漢字はあくまでも子どもの身近にあるものからピックアップする、というもの。また、漢字絵本なども、紙芝居などにして子どもたちの興味を高める工夫をしているそうです。子どもたちは漢字を見ると、たとえば、「〇〇チャンの（名前の）〇の字だ」というように、自ら発見する力を身につけていく

ようで、全体として、判断力、理解力が向上したということです。

入園希望者も、石井方式導入前と後とでは、後の方がぐんと増えてきているそうです。これも、幼児期がいかに大切な時期であるかが、父兄に理解されてきたことの現われといえるかも知れません。

近郊の保育園への働きかけもいろいろと行なっており、このところ、漢字学習の方法などを研究し始めたり、意見を求めてくる園が出てきているとのことです。幼児期の漢字学習の重要さについて、父兄だけに限らず、保育関係者にも身にしみて感じてきていることの証しではないでしょうか。

肝属郡では国見保育園が活躍中。昨年（昭和五十七年）、石井先生の公開授業を見学し、即採用を決め、さっそく今年からやり始めたといいますから、まだホヤホヤで、「石井方式については今後もっと勉強しないといけませんから、先生方も研修に励んでいます。いずれにしても、子どもたちは喜んでやっていますので、やはり大人の判断では決めつけられないことが多いですね」とは、実践開始後数か月の、平野兼弘園長が語った感想です。

6 日本で最高の普及率を誇る沖縄

沖縄では、米国の軍政下にあったころは、石井方式を実践する幼稚園は皆無でした。それが昭和四十七年の本土復帰とともに、またたく間に全県に広がり、現在では、石井方式実施園の割合は、全国四十七都道府県のなかで群を抜いて高いものになっています。

その第一の功労者は、島尻郡に鯉のぼり幼稚園を設立し、自ら理事長となって石井方式を全面的に推し進め、また、県下への普及活動に尽力した井上公志先生でしょう。現在、鯉のぼり幼稚園は、花園幼稚園と名称も変わり、理事長も交替しましたが、その果たした役割りは特筆にあたいします。同じくその当時、井上先生の片腕として活躍した前田和洋先生は、その後、豊見城村にひかり幼児学園を創立し、園長として、現在も沖縄における石井方式実践園の中核的な役割りを果たしております。

ここで、数多い実践園のうちのいくつかを「母と子の新聞」の〝素描〟から紹介してみましょう。

「まず那覇市には愛心学園（玉村八重子園長）があります。ひじょうに熱心な幼稚園で、園長、職員和気あいあいのうちにも旺盛な意欲をもって実践を深めています。

沖縄市の胡座には、又吉信一先生が開設されたリーダーズ幼児学園があります。ここはアメリカの大学の修士課税を卒業したばかりの又吉先生が、井上公志先生のもとで教育指導に当たっていて、その後独立してつくられた幼稚園です。ところが、又吉先生は不慮の死を遂げてしまい、一時はどうなるかと心配されましたが、今は城間英幸先生が後を継ぎ、その成果は着々と上がりつつあります。

同じく胡座には、ディズニー幼児学園があります。園長は譜久山良子先生です。ここも園長職員一丸となって実践に務めています。

昭和五十六年に初めて参加したものに、読谷村長浜のこばと保育園があります。その年の五月、石井先生が訪問した際、盛大に講演会が聞かれました。金城礼子園長の熱誠あふれる教育指導に、大きな成果が見られる日も遠くないと思われます。

那覇と沖縄市の中間にある浦添市には、ひまわり幼稚園（伊波枝美子園長）、平安学園（平安名常吉園長）があります。共に長い実践を積み重ねています。平安学園は、平安名園長が石井方式実践をうたって開設したものです」

最後に登場した平安学園の場合、スタート時から石井方式をかかげて開園した熱心な実践園です。平安名先生によりますと、「自分の子どもに石井方式を試みてその効果を知った」ことが動機となり、大きな励みになったといいます。

最近では卒園児が通う近隣小学校での評価も高くなり、ある小学校の先生からは「そろそろ私たちのやっていることを考え直す時期に来た」と注目できる発言があったそうで、ますます意を強くしているところです。

沖縄には、このほかに心たくさんの実践園があります。おそらくまだ二十か園以上あります。昭和五十二年に設立、五十四年には石井方式を取り入れ、実践を始めた宜野湾市のよつば幼稚園、浦添市の朝日保育園、平和学園など……。また、五十八年の二月には、前出のひかり幼児学園とディズニー幼児学園がＮＨＫ番組「日本語を決めたのは誰だ」に登場して注目を浴びました。

昭和五十八年の六月中旬から、石井先生は、沖縄県下九園で公開授業と、講演を行ないましたが、行く先々で大歓迎を受けました。「これも沖縄の皆さんの熱心さの現われです」と石井先生は語っていましたが、その〝一幕〟を六月二十三日付の「沖縄タイムス」から拾ってみましょう。これは中頭郡読谷村のこばと保育園が中央公民館で開催した、石井先生による公開保育と講演の模様です。

「公開保育では、同園の四歳児三十六人が、石井教授のわかりやすい〝授業〟を受けた。まず演壇上の黒板に書かれた森、猿、熊、狸などの漢字を使って物語を聞かせ、視覚と聴覚によってこれらの漢字を印象づけた。そして物語を聞かせ終えた後、漢字の読み方、記憶力を確めたところ、ほとんどの園児がすらすら答え、出席した父母を感心させた。

公開保育の後、講演が行なわれ、同教授は『私は十五年前から幼稚園の漢字教育に取り組んできた。脳の成長期にある幼児にとって漢字は決してむずかしいものではなく、むしろひらがなよりずっと覚えやすい。目と耳を使った学習をすれば無理なく頭に入る』と、教え方一つで幼児でも楽に漢字が覚えられることを強調した」

沖縄は、全国レベルでも、いちばん高い普及率を示しています。しかし石井先生は「盛んになった沖縄でも石井方式に疑問を持つ人がまだいますから、今後も機会があれば、多くの人に授業を見てもらい、私の話を聞いていただきたい」と意欲を示しています。

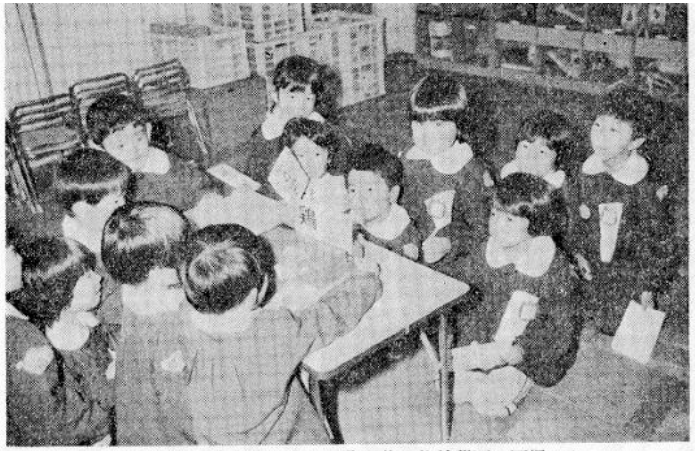
沖縄全県下で幼稚園数は私立が一〇〇近く、公立は二二〇に及び、保育園も、公立が一〇〇以上、私立が二〇〇前後あって、今後も漢字学習を普及させる余地はまだまだあるというわけです。

7 漸増傾向を見せる北海道と東北

北海道と東北地方は、残念ながら実践園の数はまだまだ少数といわなければなりません。北海道ではっきりと石井方式をかかげて実践を行なっているのは、苫小牧市の駒沢苫小牧幼稚園だけのようですし、東北では、おそらく宮城県内にある十園近くの幼稚園だけではないかと思われます。

駒沢苫小牧幼稚園は昭和五十六年から

駒沢苫小牧幼稚園は、駒沢大学の関連法人として、昭和五十年に、苫小牧駒沢短期大学、同大付属高校キャンパス内に開園した幼稚園。石井方式採用の動機は、教育目標にある「健全な身心の発達を促し、明るく素直で、人として基本的な習慣を身につけ、たくましく、創造力のある子に成長するよう努力する」ということをさらに実質的に達成しようとして、全職員あげて石井方式を研究、石井先生の指導を受けた結果、教育目標の達成のためにも「ぜひやってみよう」との結論に達して、遂に導入を決定したといいます。


自主的に漢字遊びを楽しむ駒沢苫小牧幼稚園の園児たち

実践方法は、まず環境の整備ということで、保育室の窓、黒板、鏡などあらゆるものを漢字で示し、道具箱、棚、下駄箱等の園児名もすべてひらがなから漢字に改め、万年カレンダー、文字の絵本を作成し教材として使用、その他、日常生活のなかで、何か説明を要する時は、漢字かな混り文で書き出す、という具合に徹底した漢字指導を行なっているということです。

と同時に、園児の父母、あるいは地域の人々に対しても漢字学習への理解を求め、石井先生に公開授業と講演を行なってもらうなど、努力を積み重ねてきました。そのせいか、近くの小学校では、一年生の名簿が、ひらがなから漢字に変わったという報告も届いているほどで、ここでもまた小学校への影響が出て来ているようです。

子どもたちもまた、名札を見ながら名前を漢字で書こうとする。わからない漢字が出てきても、前後の文から推理して読み、仮に読み方が違っていても、意味は通じるように読んでしまう。文字以外のことでも、図式することで理解できる子が出てくる。などと、子どもの思考力の伸展には目をみはるものがあり、漢字遊びに楽しみを覚え、積極的に参加してくるようになったということです。

ここでは、後に述べるように（三三四頁）、卒園児たちのための「国語教室」を開いて、漢字学習の浸透をはかっています。

宮城県は東陽幼稚園を中心に

北海道から一転して東北へ目を移しますと、何といっても宮城県が、石井方式の実践が最も盛んであり、その中心として活動を担っているのが仙台市の東陽幼稚園といえるでしょう。

この東陽幼稚園では、石井先生との出会いを、自ら〝衝撃的〟であったという佐藤和丸園長が、文字通り、先陣を切って指導に当たっています。鶴ケ谷のマンモス団地内にあり、七クラス、約二八〇名の園児と、一〇名の先生を力強く牽引し続ける佐藤先生は、本書編集部に一文を寄せてくれました。

長くなりますが紹介させていただきます。なお、本書三九頁のカットは、佐藤先生自らが、教壇に立つさまを、自分で似顔絵風に描いてくれました。先生は絵画の指導も行なっているのです。

「漢字は複雑なほど幼児にとっては覚え易い。人間だってそうです。複雑な顔の人ほど、特徴があればあるほど忘れませんね」

ここまで石井先生がおっしゃると、会場をうめつくした親達は一斉に私の方を見た。石井先生もそれにお気付きにたり「そうそう、ここにいる和丸先生なんか特徴があり過ぎて、一度会ったらもう絶対に忘れないでしょう」

これで一同大笑いとなった。何でもそうだと思うが、新しい試みをする場合、準備期間をおいて段々充実させて行くという方法は結局実を結ばずに終ってしまうようだ。

我が園で漢字教育を採用する時もそうだった。昭和五十四年の夏に伊東温泉で石井先生と衝撃的な出合いがあり、その秋にはもう先生を我が園にお迎えして講演会まで開いた。そのあとすぐ「漢字のフラッシュカード」や「学習漢字園解辞典」「漢字の教養」を姉妹園三園を含めて全二十六クラスに配置した。クラスで自由に使いたい時に使うようにと理事長から説明があった。種々クラスで試みたのはその内の十クラス。我が園だけであった。他の園の職員は批判もせず疑問も持たず埃をつけたまま放置しておいた。幼児もそうだが、大人でさえ自由にというとこのような結果になる。

年が明け、五十五年四月から強制的に〝やらせる〟ことにした。これで軌道にのり出し、結局創意工夫のできない職員は自ら姿を消して行った。それでよかったと思った。幼児は成長を止めて待ってはくれないのだ。我々が暗中模索をしている内にもどんどん頭の中で膜を作り始め、天才的に働く記憶力思考力を封じ込めてしまうことを考えたら、職員を説得し教育している暇はなかった。やる気のある者だけ残れ集まれという感じたった。親の方は戸惑いを感じながらもよく幼稚園の方針を理解し、信頼をよせてくれたので、波風はたたなかった。導入方法がうまかったのだと自負している。

それよりも何よりも、漢字に興味を示し、読むことの面白さを誰よりも子供自身が一番先にわかったということが普及の原動力となった。

我々はまず教室中を漢字だらけにすることから始めた。フラッシュカードをコピーし、物の名称として貼り付けた。父の日や敬老会にはそれに相応しい論語を選んで一斉に読ませた。参観していた父

親や祖父母から思わず拍手がわいたクラスもあったという。園児へのお土産も「俳句漢字カルタ」や「諺カルタ」をあげるようになった。「学習漢字図解辞典」や「漢字カード」も個人で購入する家庭がふえた。

ここまでくれば、もうあとは内容の充実だけであった。内容の充実といっても、いとも簡単で、なるべくたくさん漢字を見せればそれで済む。つまり言葉のひとつとして「見る言葉」である漢字をただ表記しておくだけでいいわけだ。読もうが読むまいが必要な時にカードを出し、或いは黒板にどんどん書き出し、指差しながらいつもの通りお話をするだけのことである。教えようとしない時ほど子供達は覚えてしまう。これが不思議だった。逆に教え込もうとすると駄目で、拒否さえする。この辺の何気ないテクニックだけは与える側が会得しなくてはならない。更に教師自身が語彙を豊富にし、はっきりした口調で優しさと気魄で子供達に臨まなくてはならない。

絵画の時間、導入の際にこの「見る言葉」はすごい威力を発揮する。お父さんお母さんの顔をかく時などは勿論のこと、初めて水彩絵の具を使わせる時の絵や、何とボディペインティングの時まで、私は綿密な配慮のもとに脚本を書き、提出漢字も選び出して教師に手渡す。それを各自が読み、更に自分でアレンジして毎回大成功となる。実演する教師自身が驚いている。

近隣の幼稚園で絵画の研究保育があり公開した。お話を聞いてそのイメージを絵にする授業だった。「チビクロサンボ」のお話だった。帽子の色や傘の色など、その先生はこれまで何日も子供達に話し続けてきた。お話の内容が子どもの心に残るようにと大変無駄な努力をしていた。案の定、公開当日のお話には子供達は全然関心を示さず、わざと別の色を言って先生を困らせていた。出来上った絵は一番つまらない場面、サンボが散歩している絵がほとんどだった。授業のあと自評と質疑応答があった。私も〝俄助言者〟となり、助言を求められた。

「あなたはこの物語のどこが山場で、どこを子供達にかかせようと意図していましたか」

「さあ････、全然考えていませんでした」

「それでは、アフリカの話や土人の話、虎の生態、ジャングルに繁る樹木、バターやチーズについて事前に図鑑などで教えましたか」

「いえ、全然教えませんでした。ただ同じ本を何度も読み聞かせれば子供達がそれを記憶してかき易いのではないかと思い、ただただ繰り返しました」



佐藤和丸・画

この絵画指導に教師の手杖は何ひとつなかった。適切な指導を施していなかった。

漢字を使って話すように助言した。

その場では彼女達は納得したようだった。しかし、この漢字による導入法をすぐ現場で使っていないことがすぐわかる。何故なら、その威力に驚き必ず私のところに電話がはいるに違いないからだ。やはり、漢字だけが持つこの素晴らしい〝資質〟を理解しようとしないばかりか、使ってみようともしないのだろう。あの時の助言でピンとくる位だったらあのような指導などしているわけがなかったかも知れない。

私は今、二歳から小学校六年生までの子供達を二七〇名ほど絵画教室で教えている。導入には必ずこの漢字を使う。勿論、子供達は何の抵抗もない。ごく当りまえとしてうけとっている。

他県の幼稚園から保育を依頼されても、三歳だろうが四歳だろうがかまわず黒板を漢字でうめつくす。抵抗を示すのはその様子を見ている幼稚園の教師達だけだ。教師を相手にせず、子供達に直結した方がいい。

「子供達よ、言葉を目で読み取れ！」

この言葉を心に念じながら私はいつも子供達の前に立つ。

以上が佐藤先生の書いた〝わが実践記録〟とでもいうべき一文です。文中に姉妹園三園とありますが、これは、いずれも仙台市内にある東盛、東盛第二、東岡の各幼稚園のことで、三園とも佐藤先生の努力が実を結び、漢字学習を実践しています。

佐藤先生はまた、石井方式の普及活動にも熱心ですが、今のところ近辺では、一園が採用に踏み切ったところで、「どうも各幼稚園の〝上の方〟に理解してもらえず、伸び悩みといったところです。園長、主事クラスの姿勢が消極的ですね」と残念がっています。また、近隣の幼稚園に限らず、他県からも見学者が東陽幼稚園へ年に何回か来るそうですが、重箱のスミをつつくような評価をする人もい

たりと、こちらもいささか問題ありといったところ。もちろん佐藤先生は、だからといって指をくわえて見ているわけではないそうですから、今後の活躍を大いに期待して良いでしょう。

仙台市内では、東陽幼稚園のほか、第一ひろせ、第二ひろせの二つの幼稚園でも、あわせて二二〇名余りの園児たちが、四、五年前から漢字学習を実践中です。音感教育とともに、この両園の教育の大きな柱を形成していますが、やはり、知的能力、思考力の向上に非常にプラスになっているそうで、卒園生の通う小学校でも、その二点と、子どもに自主性が高いという面が評価されているといいます。ただ、小学校の先生のなかには、そういう子どもたちをうまく受けとめることができず、「やりにくい」といった声があるとのことです。

仙台市には私立の幼稚園が約一〇〇園あります。前出の幼稚園を含めて、石井方式実践園は一割に満たない数です。仙台以外の宮城県内では、古川市の古川まこと幼稚園、柴田郡の熊野幼稚園が目につく程度です。それでも、石井方式が〝東北地方に根をおろすことはないだろう〟との、一方的かつ偏見に満ちた評価は、もう完全に間違いであり、破棄すべきものになったといい切れるでしょう。

8 北関東の三県では……

群馬、栃木、茨城の三県のうち、群馬は数園、栃木、茨城では一〇園余りが、漢字教育を実践しています。栃木のすぎのこ幼稚園が昭和四十五年開始と最も古く、その他は、最近の七、八年以内という園が多いのですが、いずれの園も大変熱心に取り組んでいて、そのため、教員の研修や研究活動が盛んなことも特筆できることだと思います。それでは順に、その歴史、子どもたちの様子などを見ていきましょう。

園児の〝精神的成長〟にも意を注ぐ群馬の江木幼稚園

群馬県では、その代表として前橋市の江木幼稚園のケースを取り上げてみます。昭和三十三年に創立され、石井方式は五十四年四月から採用、漢字絵本やフラッシュカードを使用するほか、ちょっとユニークな試みもしています。それは園児たちが覚えた漢字を、たて九センチよこ六センチのカードに毛筆で書き、それをコピーして全園児に渡し、家庭に持ち帰って、そこでもまた楽しめるようにし

ているというものです。

子どもたちにとって〝反復〟がいかに重要であるか、石井先生が常に説いていることですが、幼稚園で一日数十分漢字で遊んで「ハイ終わり」では、その反復がなかなかできにくいことになります。この意味でも、園と家庭とが協力し合う方式は、大変すぐれていると思われるのです。第一、子どもも親も、一緒になって漢字で遊ぶことは、単に漢字を覚えるというばかりではなく、親子のコミュニケーションを図る上でも意義のあることといわなければなりません。

さて、江木幼稚園では、どうして石井方式を導入するようになったのか、その前後のいきさつはどんなものがあったのか、あるいは子どもたちの様子などについて、園長の太田きみ子先生はこんな風に説明しています。

「特色ある幼稚園として、いったいどんなことを取り入れようかと考え、また、幼児が卒園するまでに、どれほど努力しても、なにか精神面での成長に〝あと一歩もの足りない〟と感じながら園児を送り出していたのです。何年もこのようなことに悩んでいましたが、いつでしたか、ある大学の先生のお話をうかがっている時、幼稚園で漢字を数えているところがあるとおっしゃったのです。その後、石井先生の講演をお聞きする機会があり、そこで私の考えが決まりました。初めには、父兄に、石井先生から直接お話をしていただき、そのあと、父兄全員にアンケートを取ったのです。集計しますと、漢字学習に賛成の人が九〇パーセントを超えていました。それでいよいよ実施に踏み切ったわけです。

初めのころは、教師の側もどう指導したら良いのか、あるいは子どもたちは本当に覚えただろうかと、不安がありましたが、結果は、子どもたちがやたら泣くことがなくなり、気持ちが落ち着いて来ましたし、以前にくらべて、目が輝くようになりました。全く、子どもたちは、乾いた地面に散水したように、すばやく漢字を吸収していくのには驚きました」

子どもたちの良い意味の変化はこれらだけではありません。身の回りの整理整頓がキチンとできるようになり、ものごとに集中力が出て来たそうです。あるいは漢字で歌詞を示すと、歌をすぐ覚え、県名、都市名なども多く覚えて視野が広くなったといいます。また、家庭でむずかしい漢字をスラスラと読むために、兄弟たちがあ然としてうらやましがった、などの報告が父兄から相次いだそうです。

江木幼稚園はまた、先生方の研究熱心なことでも知られています。教える立場、教えられる立場から、もっといろいろ工夫する余地があるのではないか、あるいは自らの行なった学習における効果は

どんなものがあるのか、など漢字についての研修を、太田先生がリーダーとなって毎日行なっているというのです。

このほか、小学校一～三年に在学する卒園生のうち、とくに希望する園児には、週に二回、漢字の指導を行なってもいます。毎年希望者が数人あり、現在は約一五人が元気に通って来ているそうです。

こうして、いまでは「漢字学習を頑張って続けて欲しい」という親の声がよく聞かれるといいますから、漢字学習は完全に定着したといえるわけです。

栃木ではすぎのこ幼稚園が〝先導者〟役を

昭和四十六年の十月二日付「朝日新聞」に、漢字教育を始めて一年余り経過した那須郡西那須町のすぎのこ幼稚園の記事が載りました。少し引用してみましょう。「鳩、梨、蝶〝読メチャッタ〟一年に二～三百字　遊びながら自然に覚える」という見出しがついています。

「『鳩』『梨』『蝶』……小学校低学年でもちょっと読めそうにない漢字だが、三、四歳の幼稚園児たちが声を合わせてスラスラ読むーー那須郡西那須町扇町、すぎのこ幼稚園での授業風景。同園は昨年秋から、幼稚園では珍しい漢字教育を取入れて効果をあげている。（中略）二年保育、四歳児の教室。先生が示す二枚の漢字カードに、園児たちは勢いよく手をあげる。名を呼ばれて坊やがみんなの前に出て、まずその二つの漢字を読み、その揚で漢字を組合わせてお話を作る。

『森』にいる『牛』さんのお話。『雨』に降られた『毛虫』さんのお話。園児たちは目を輝かせてお話に聞入り、終るとかわいい手で一斉に拍手する。（中略）

同園では、とくに漢字教育のための時間はない。遊戯、歌など幼稚 園教育のカリキュラムの中に、漢字教育が取入れられている。『漢字を教えこむのではなく、関心、興味を持たせること、身辺に漢字をおいて、遊びの中で知らず知らずのうちに覚えさせるのがねらい』と戸田園長はいう。



（以下略）」

こういう調子で、園児たちが一年間に二百から三百の漢字を覚えること、「家で新聞の見出しを読むようになってビックリ」「ウチの子はテレビの番組や相撲取りの名前を読む」「魚ヘンの字を幼稚園で教わって帰り、辞書をめくって他の魚ヘンの字をさがす子もいる」といった子どもたちの織り成すエピソードの紹介、そして、「漢字を習いはじめてから、態度にも落着きが出て、言うこともしっかりしてきた」「物の性質のとらえ方がうまくなり、自分自身に自信を持つようになった」など、子どもたちの著しい〝成長〟ぶりもあわせて載せていました。十二年も前に、すでにこれだけの成果を上げていたことがよくわかるでしょう。

ところで、園長の戸田白鳳先生は、このころ、県立のある女子高校の、国語教師を務めていました。やはり、年々低下する生徒の国語力に頭を痛めていたといい、これなども、幼稚園で漢字学習を取り入れる勤機となったそうです。

当初の父兄の反発など、もちろん今では、過去の〝語り草〟とでもいうべきものなのですが、県下の他園ではなかなか石井方式の採用に踏み切れずにいるそうです。戸田先生は「栃木は保守的ですからね」といっているのですが、たとえば、いろいろな会合に出ても、県の行政担当者らが幼稚園の関係者に、「まさか（漢字学習を）やっていないでしょうね」とクギをさすことが今でもあるとのこと。従って、幼稚園の園長や指導者クラスもつい及び腰になってしまう傾向があるというのです。公立を含め、県下に約二二〇近くの幼稚園が存在していますが、なかなか壁は厚いといったところでしょう。

このほかにも、那須郡には那須幼稚園、黒磯市には黒磯、黒磯第二、宇都宮市では陽の丘第二、あつみの各幼稚園、さらに足利市に本城保育園――などが栃木県内で、熱心に漢字学習に取り組む実践園として知られています。

保育園の実践園が多い茨城県

茨城県内の実践園の特色は、その多くが保育園であることです。茨城でいちばん早い実践園が那珂湊市の堀川保育園であり、その園長の堀川秀雄先生の懸命な普及活動のたまものです。これは、全国的にみても、珍しい傾向といえるでしょう。

さて、その堀川保育園――実践を始めたのは実は昭和五十三年で、五年ほど前のことです。早くか

ら、その熱心な漢字学習ぶりは、注目の的となり、今では茨城県内において指導的役割りを果たしているわけです。

園児数一五〇名。石井方式採用後、それまではほとんど公立幼稚園へ転入していった年長児が、そのまま保育園に残る傾向が強くなって来たといいます。ちなみに昭和五十八年度の場合、六五名の五歳児のうち四〇名が保育園に残り、漢字学習をつづけています。これなども、一つの理由として、漢字教育の効果に父兄が気づいて、引き続き子どもを通わせようとしたためと見ることができます。

熱心な指導者である堀川先生と石井方式との出合いは、石井先生の著書『石井式漢字教育革命』を読んだことに始まったといいます。堀川先生はその石井先生の考えに感激し、さっそく園に招いて公開保育と講演をしてもらったそうです。そして、園での実践を開始したものの、当初はどうも先生方の側に抵抗感がありましたが、三年目あたりから、ようやく軌道に乗ったようです。その辺の〝事始め〟の苦心について、堀川先生はこういっています。

「最初は教師に対して実践園の見学をさせる。第一回では納得できなく足踏みの状態。二回目によううやく心を開き、実施しようとする足を一歩前に出す。三回目からはためらうことなく前進する」と。

教え方の原則は〝即時即物〟で。たとえば、教室に螢が飛び込んできたら「螢」を、芋掘りに行けば、「芋、葉、茎、蔓、根」を示す、という具合に、先生たちがその時々の状況に応じて漢字を提示する教授法を取っています。ところで、堀川先生は、数年前に、「わが園の漢字教育」と題した冊子をつくりました。これには、保育園から毎月出ている「園便り」や「組便り」に、漢字学習について堀川先生が書いた文の抜すいをまとめて載せてありますが、その最後に「漢字教育についてのアンケート」が掲載されています。父兄の関心、期待などが良く表われていますので、少し例示してみましょう。答えているのは、四歳児の父兄。

まず、石井先生の漢字教育の話を「した方が良い」四九名、「少しは良い」二八名、「しなくて良い」ゼロ、解答ナシ八名。保育園での漢字教育について、「ぜひ積極的に」四八名、「まずまず良い」二〇名、「しなくても良い」ゼロ、解答ナシ七名。家庭で漢字を教えているかという問いに対しては、「毎日している」六名、「一～二日おきぐらいに」一二名、「三～四日おきぐらいに」七名、「たまにする」三九名、「全然しない」八名、解答ナシ四 名。「お子さんは漢字を喜んで覚える」二三名、「まずまず覚える」四四名、「覚えない」五名、解答ナシ四名、家庭でお子さんに「この字なあに」と聞かれるか

どうかについては、「よく聞かれる」三二名、「たまに聞かれる」三六名、「全然聞かれない」三名、解答ナシ三名……といった具合に続きます。

この結果を見ますと、子どもたちの熱心なさまがよくわかりますし、父兄の保育園への期待感の高いことも理解できます。が、どうも子どもたちの方が、父兄の考えている以上に、漢字学習を喜々としてやっているようで、父兄としてはチヨッピリ認識不足といえるのかも知れません。

さて、堀川先生の石井方式の普及にかける情熱は、いまもすこしも変わりません。茨城県下の実践園はすでに「もう二〇園を超えている」といいます。ただし、公立の幼稚園、保育園はなかなか腰を上げようとしないらしく、少々冷淡なところもあるといささか残念そうです。また、近隣の小学校でも、先生方は「心では賛成していても、口に出して賛成はなかなかしてくれない」ということですが、父兄の方は「正直で、ほとんど疑問を持つ人はいないし、積極的に賛意を表わしている」と、心強い応援の声に勇気づけられると堀川先生は述べています。

ではここで、堀川保育園以外の茨城県内の主な実践園を見てみましょう。

勝田市では市毛フレンド保育園が実践中。ここは昭和五十四年の開園と同時に石井方式を採用しました。園児数二五〇名。漢字学習を始めてから、他の幼稚園へ移る子どもがほとんどいなくなり、逆に幼稚園から転入してくる場合もあるといいますから、すでに石井方式は根づいたといえるでしょう。

最初のころは、漢字絵本とフラッシュカードだけで漢字学習を行なっていましたが、三年目から諺カルタ、そして現在では百人一首も取り入れています。

「長い時間預かっているお子さんに、遊びだけなく、教育面をと考え石井方式を取り入れています」と、磯崎千尋園長の言葉です。

堀川保育園とともに那珂湊市には平磯保育園があります。堀川幼稚園に遅れること一年で、石井方式を取り入れましたが、ここでも幼稚園から転入してくる子どもが目につくそうです。

筑波郡大穂町で実践しているのが、吉沼保育園。五十五年から漢字教育をはじめ、年々園児数が増えてきて、遂に幼稚園も開設して（吉沼幼稚園）、それに対応しているとのことです。「父兄も子どもの成長に必要であると全面的に賛同し喜んでいる」と星野茂丸園長は語っています。

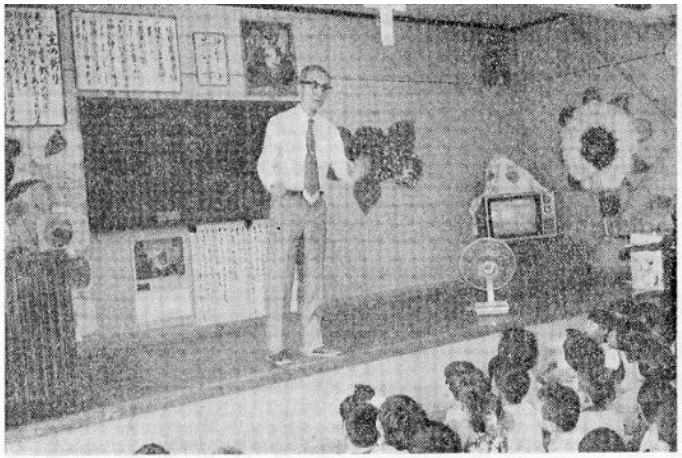
9 活況を呈する埼玉、千葉、神奈川三県

埼玉には実績十五年のあやめ保育園

南埼玉郡菖蒲町のあやめ保育園は、昭和四十三年秋から漢字教育を開始しました。石井方式実践の第一号、大阪・小路幼稚園に遅れることわずか数か月という古くからの実践園として知られています。

現在七十五歳になる園長の寺田新先生の熱意ある指導のもとに、これまで変わることなく漢字教育を行なってきましたが、子どもたちは一様に、集中力が身につきクラスにまとまりができて、外遊びも活発になるという良い結果をもたらしているそうです。

あやめ保育園の熱心さは、次のことでもよくわかると思います。それは、石井先生に、毎年一回必ず来園してもらい、園児の父兄、及び地域の人々に対する「授業教育講演会」を開催していることです。昭和五十八年までに十五回を重ねました。一園で催された石井先生の講演会の回数では、これが最高記録となっているほどです。



石井先生のお話に聞き入るあやめ保育園の園児たち

石井先生も「毎年その講演の時期が近づくと、寺田園長からの御依頼の電話が待遠しいほどです。ここまでになると、御依頼のある限り、どんなに多忙になろうとも、お応えしなければ相済まないという思いで一杯です」とこの講演会には大変な思い入れがあるようです。

寺田先生はなぜ石井方式を実践しているかについて、「石井方式は真理であるから、園児に最良の幼児教育をそれでやるのだ」とズバリ断言しました。

八潮市にある八潮学園は、昭和五十四年から漢字教育を始めました。当初は「なんであんなむずかしい漢字を教えるのか」との批判もありましたが、今はほぼ聞くことがないと園長の内田トキエ先生は語っています。

三歳児から、週三回、一日十分ぐらいずつ漢字絵本など

を利用し実施しているそうで、時には諺カルタ、俳句カルタも使い、フラッシュカードだけは毎日読ませるというカリキュラム。「園内のロッカーやくつ箱に貼る名札も全部漢字を使用しているため、すぐに判別がついて、玄関で混雑したりすることがなくなり、また、子どもたちが知的になってきたためか、けんかをしたり、ケガをすることも少なくなりました」と内田先生はその効用のほどを説明しています。

この他、八潮市内では、潮止、第二潮止幼稚園などで実践されています。

浦和市内では淑徳与野幼稚園が漢字教育を三年前から実施、今では約二五〇人の園児がこれを受けているところです。この浦和市には私立の幼稚園が五〇園以上ありますが、漢字教育は、淑徳与野幼稚園だけのようで、まだまだ普及拡大の余地はいくらもあると思われます。

埼玉県内では、これらの幼稚園のほかにも、越谷市のアスナロ、松沢、大袋の各幼稚園、春日部市の豊春幼稚園、飯能市の大東幼稚園、岩槻市の若葉幼稚園などが、ズラリ歩調を合わせて漢字教育の真最中といったところです。

四十七年から導入のコスモス幼稚園、論語のたきのい幼稚園など千葉県の現状

コスモス幼稚園は船橋市内にあって、昭和四十七年度から漢字学習を採用しています。園児数二三〇余名で七クラス。実施方法は、まず三歳児には、身近な具体物を漢字で示し、とくに〝同類〟の漢字の発見を促します。四歳児になると、次第に、具体物から抽象的なものの漢字を増やし、同時に形容詞、動詞なども組み入れていくようにし、五歳児では、文章化能力を高めるため、「桜（さくら）が咲（さ）く」といった例のように、ルビを用いながら、ひらがなも一部導入する方式で、漢字学習をより豊かなものにする段階を踏んでいくようにしているそうです。

子どもたちは、たとえば「梅、桃、桜、梨」といった漢字を見て、「木」という字がどれにも含まれているから「木の仲間だよ」と、おのずから、より高度の概念を把握できるようになるとのことです。

園長の戸村静江先生は「教師の側が理解し実施するまで、二年の年月を要しました」といいますが、現在はもちろん順調なペースで進んでいるといえます。

市原市にもいくつかの実践園があり、さなぎ幼稚園もその一つです。二九〇名近い園児がいますが、

一般的に出生率の低下とともに園児数は減少していく現象があるにもかかわらず、ここは増加傾向を見せています。これも、石井方式の実践ゆえなのかも知れません。

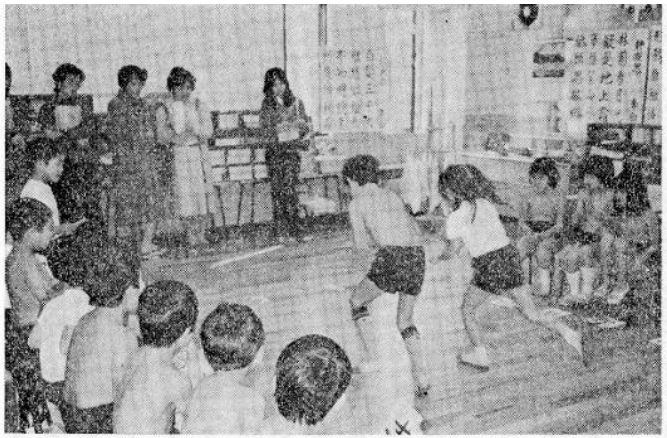
千葉市はさすがに人口も多く、従って幼稚園の数も多いため、実践園は一〇園近くになりそうです。十年ほど前から早々と石井力式に取り組み、現在約二八〇名の園児が漢字で学習している院内保育園や、市内でも、その熱意ある指導に定評を得ているひまわり幼稚園と第二まこと、第三まこと幼稚園（第一は八千代市で実践中）など目白押しです。

船橋市のたきのい幼稚園は、例年七〇頁ほどの、りっぱな「漢字教育実践記録」を出しているところです。その五十七年版によりますと、石井方式の採用に踏み切った五十四年のころの戸惑い（とくに先生方にとって）などがその記録には率直に書かれています。「漢字が〝かなよりもやさしく覚えやすい〟という石井先生のお話はあまりにも夢のようだった」「石井先生の講演を三年前に初めて聞いた時には、幼児に漢字が読めるということさえ驚きであった」などという感想があちこちに語られています。

しかし、「本を大切にする本好きな子どもになったのはうれしいことである」「芭蕉の句を提出すると意味の解釈をする子どもまで現われた」「子どもたちは漢字が大好きである。子どもたちに漢字を提出すると、『見なさい』と強制しなくても注目する」といった風に、子どもたちがドンドン成長していくさまを現実に経験すると、「今では、漢字教育を当たり前のこととして行なっている自分の姿に驚いている」とまで確信を持って指導に当たるようになっていくのです。

たきのい幼稚園では、論語にも取り組んでいます。論語に造詣の深い園長の越川春樹先生の指導のもと、昭和五十七年から実施していますが、「論語までやるのか」という大人たちの反応とは別に、越川先生によれば「論語などは子どもが一番好きで、昼休みや放課後、先生の指棒をうばい合って互いに得々と語り合っている」ほど、子どもたちの心をとらえているそうです。園児の喜々として漢字とたわむれる姿が目に浮かぶようです。

千葉県では、ほかに、四街道市の銀の鈴幼保育園、我孫子市の布佐台幼稚園、海上郡海上町のうなかみ幼稚園など多彩な実践園が活躍中です。


裸で元気よく漢字ゲームに興じるひかり幼稚園の子どもたち

川崎のひかり幼稚園を筆頭に多士多済の神奈川県

神奈川県では、まず筆頭にあげられるのが、昭和四十三年から開始した川崎市のひかり幼稚園でしょう。現在では、同市内にある第一と第二の両園で合わせて約七〇〇名近い園児が実践中です。園長の吉田尚弘光生は、当時を振り返って、「父兄はもちろん、教師の方も、保育の学校で漢字学習のことなど教育を受けておらず、逆に幼稚園での文字教育はいけないものという考え方が強かったため、反対者がたくさんいたものです。それに、そのころは、教材も全くなく、暗中模索で、漢字カードと絵を合わせるようなものをつくったり、〝漢字の泉〟と名づけて、箱のなかに、二、三センチ角のカードに名詞類の漢字を印で捺し、数多く入れておいて、そのなかへ子どもたちが手を入れて一つずつ取り出し、読めたら子どもにあげるなどいろいろと工夫しました。この〝漢字の泉〟はいまでもやっていまして、子どもにはなかなか好評ですけれど……」

現在とはまさに雲泥の差がありますが、当時の〝草分け〟的存在であった幼稚園は、このひかり幼稚園に限らず同じような苦心を重ねてきたわけです。

ところで、こうした園児たちへの漢字教育の指導が、どんな形で良い結果をもたらして来ているかについて、吉田先生はこう語っています。「一般的な傾向としては、まずＩＱが高くなったことですね。入園前の平均指数は、一〇〇ぐらいですけれど、漢字学習を実施しますと、平均一三〇、年によっては年長児の平均が一四〇ほどになったこともあります。もちろん本好きの子どもになり、推理力、判断力が向上して、いろいろな面でものすごく意欲的になります。卒園して小学校へ上がっても、社会性が出てきて友だち関係もうまくなり、授業内容がよくわかるため、国語はもちろんですが、算数や理科、社会科などが得意になる子が多いですね」

そのほかに、吉田先生が強調していることがあります。それは、何といっても、同音異義語の多い日本語を、正しく理解するためには漢字の使用が不可欠になるし、ものごとを正確に認識することに、

ひらがなばかりだと、弊害が出て困ってしまうという点です。これについては、吉田先生が雑誌「漢字漢文」の昭和四十七年第十号に害いた文章がありますので、その一部を引用してみましょう。

「……さて、物事の正しい認識をさせなければならない幼児期に、ひらがなの弊害があっては、誠に困ります。事実、その困った問題が、あっちこっちで数多く見受けられるのです。たとえば、あるおかあさんが、『うさぎおいし、かのやま……』と、かなの歌詞を子どもに見せながら、歌って聞かせました。すると子どもが聞いて、『おかあさん！ ぼく兎って食べたことないけど、そんなにおいしいの？』……。

私どもの園歌の歌詞に、『にこにこ笑顔のお友達……』とあります。五、六年前でしたが、かなで『えがお』と示し、何のことか園児に問い質してみると、『先生それはね、絵に描いた顔だよ』と答えました。この子は、ひらかたを全部読める子どもでした。漢字で園歌を示している歌詞では、どの園児に聞いても、すぐ『笑っている顔です』という答えがはね返ってきます。（中略）

せっかくのすばらしい情緒が、正しく伝わらないことは、本当に残念なことです。ひらがなだけの歌詞は、時々弊害を起こします。（以下略）」

たとえば、かなだけの絵本は大人にも（だから?）読みにくいことこの上ありませんが、これなども吉田先生の指摘する〝弊害〟から生じることを端的に示しているといえるでしょう。

ひかり幼稚園は、漢字学習はもちろん、一日の園内での生活を子どもたちが裸で過ごす「裸教育」でも有名です。〝裸と漢字のひかり幼稚園〟なんてキャッチフレーズをつけられることもあります。文字通り、子どもたちは、ここで〝心身〟をきたえているようです。

さて、川崎に隣接する横浜市を見てみますと、ここでも一〇園近くが漢字教育を実践しています。中でも港北区の城郷幼稚園は十年以上の歴史を持っています。園長の安藤仁雲先生によれば、幼稚園での幼児は、すべて遊びの連続であると考え、漢字学習も〝漢字遊び〟と名づけています。はじめたころには、ひかり幼稚園を全職員で見学し、また石井先生の公開授業を父兄とともに参観し講演を聞いたりしました。そして新しい教育方法としての漢字学習の必要性を十分理解した上で、開始したため、その結果は予期していたように、園児の目は輝き、漢字遊びを楽しむ様子は指導に当たった先生方も驚くほどだったといいます。

同市内の鶴見区では、やよいが丘幼稚園が、昭和四十九年のスタートと、かなり以前から漢字学習

に取り組んできました。園長の原ミネ先生によりますと、ある講習会に参加して石井方式を知り、賛同してすぐに採用に踏み切ったといいます。父兄からはそれほど強い反対はなかったけれども、逆に教師の側のとまどいが強く、ほとんどいやいやながらやり始めたとのことですが、実施してみると、子どもたちが強い意欲を示し、また反応が素早くて、園児に教師が押しまくられた格好で続けるようになったそうです。これまでの卒園生たちの動向はどうかと聞いたところ、小学校の生活にスムーズに溶け込んで余り手がかからなくなり、集中力が出てきたと父兄は喜んでいるといいますから、あちこちの実践園で聞かれた成果がここでもはっきり表われています。

川崎、横浜以外では、横須賀、三浦、南足柄、相模原、伊勢原といった各市にも実践園が点在しています。そのなかのいくつかを見ますとー。

横須賀市太田和の新興住宅地域にある相武幼稚園は、石井方式を幼児教育のパイオニアと位置づけています。また様々な教育の原理を模索している全国の団体、研究グループにも参加しつつ、石井方式を昭和五十三年から実践し、大きな成果を上げています。漢字絵本、フラッシュカードを始め、百人一首の暗唱なども試みるとともに、他の知育方法と一体化させた形で漢字学習を進めています。

三浦市の市街地には徳風幼稚園が、昭和五十六年に〝トライアル〟をし、翌五十七年の四月から本格的に漢字教育を始めました。現在、園児数は約一二〇名というところですが、実は近隣幼稚園では、このところ、のきなみ園児減に悩まされているのに、ここでは、逆に増えているといいます。その理由として、「やはり口コミで伝わった石井方式についての評価が高いことの表われかも知れません」と、稲垣英夫理事長の弁です。

伊勢原市にもまた昭和五十七年に石井方式採用と、新しい実践園に数えられる立正幼稚園があります。大きな絵文字カード、漢字カード、それから運動と漢字とを結びつけたり……バラエティに富んだ方法を考案、実行しようという意欲にあふれる幼稚園です。

以上、神奈川県内の実践園をごく手短かに素描してみましたが、いずれの園も、園児はもちろんのこと、父兄、先生方ともども意欲に溢れた積極的な取り組みを見せているのはいうまでもありません。

10. 数十に及ぶ都下実践園の様々な表情

さて、東京の実践園の紹介を始めるわけですが、まず第一番には、おそらく東京ではもっとも早く石井方式を取り入れたと思われる足立区の梅島幼稚園をあげることにしましょう。

東武線の梅島駅から歩いて五分ほどの、下町の一角に梅島幼稚園はあります。園児数一二〇名弱。創立は昭和二十七年。石井方式は四十四年の十月から採用しています。といっても、当初は、下駄箱の名札をかなから漢字に変えたりする程度で、父兄の理解を得るためにも、急激かつ全面的な導入方法は取らなかったといいます。それでも、名札を漢字に変えたところ、それ以前の、ひらがなとマークを使って、子どもの靴を入れる場所を指定したやり方ですと、三日から一週間ほどかけないと子どもはその位置を覚えなかったのが、早い子で一日、遅くても三日で覚えたといいます。そして、これが漢字学習の効果に対して「納得できると思わせた大きな理由」と園長の山下宏一先生は語っています。

山下先生が石井方式と出会ったのは、四十四年に三重県鈴鹿市で聞かれた、ある研修会の席上ということです。その時、石井先生の講演を聞き、かねてから、漠然と従来の幼児教育に対して抱いていた不満が、みごとに解消したといいます。山下先生はこのことを「幼児の可能性を解明した最新の科学、大脳生理学に理論づけられた、幼児の可能性を十分に伸ばし得る石井方式に着眼」したと表現しています。このように始められた漢字教育ですが、七、八年の間はいわば、基礎づくりとでもいえる時期だったそうで、現在のような学習パターンになったのはそれ以降のことです。

では、現在の学習はどんなやり方で進められているのかといいますとー。

まず、漢字絵本を、一回に二頁ほど読み進み、慣れたら一冊まとめて読み返す。こうして同じ本を一か月間使用、このペースで年間十二冊を間違いなく読破するそうです。

もうひとつ。これがこの梅島幼稚園の特色でもあるのですが、いわゆる〝朗読〟を行なっている点です。それも、日本の先人たちがつくりあげてきた「古典」とでもいうべきものをどんどん使って進めるのです。年中・年少児は、諺、格言、俳句などの朗読をします。「犬も歩けば棒に当たる」「蛙の子は蛙」「猫に小判」「山路来て何やら床しすみれ草」「やせ蛙負けるな一茶ここにあり」といった句を、子どもたちは、先生の掲げる大判のカードを見ながら、大きい声で一せいに朗読するのです。その光



「千里の道も一歩より！」と梅島幼稚園の子どもたちは元気よく……

景はまさに壮観の一言につきます。

朝、園児が登園してくると、一つか二つの新しい句を既習の分とあわせて朗読します。この時間わずか二、三分。降園時に、その日に示した新しいカードの反復を一分以内で。たったこれだけのことで、子どもたちは年間一〇〇の諺（五～十月までに）と、五十の俳句（十～二月まで）を完全に覚え切ってしまい、三月には、かの有名な宮沢賢治の「雨ニモマケズ」を朗読するといいます。

年長児になると、時間配分の要領は年中・年少組と同じで、今度は百人一首を毎日一首のペースで四月から九月までひと通り朗読し、十月ににその復習、そして十一月からは万葉集、伊勢物語、枕草子、徒然草等の中から名文を選び、同じく朗読させるよう指導しています。

こうした漢字学習の積み重ねのなかで、いったい、子どもたちはどう変わっていくのか、どう成長するものかーー山下先生はこれらについて以下のように明快に語りました。「まず、目が輝いて生き生きとして来る。さらに、記憶、理解、判断、推理の各能力が向上し、情緒面でも一段と伸びる。また、発音がよくなり、語調、語感がわかるようになってボキャブラリーも当然増え、そうして本好きになる」というのです。

その結果、卒園生たちもまた、作文が好きになったり、国語が得意になったりして、小学校へ上がってからの学校側の評価も高いといわれるのも、納得がいくところでしょう。

山下先生はまた、近隣幼稚園への普及活動にも力を入れています。ここ七年くらいの間に、足立区内だけで実践園が一〇園以上に増えたことにも相当な尽力があったと思われます。

特色を競い合う各実践園

そのためか、東京都内の実践園のなかで、梅島幼稚園のある足立区は群を抜いて多くなっています。同区佐野のいずみ幼稚園もそのひとつ。足立区六十三番目の公認幼稚園として五十一年に開園、現

在二〇〇名以上の園児が、石井方式による漢字学習に熱心に取り組んでいます。

同じく足立区弘道にあるのぞみ幼稚園は四十七年に創立されました。この園では、石井方式と出会う前に「かな文字には意味がない、漢字には意味がある」との観点に立って、象形文字からの漢字導入を計り、新しいカリキュラムを作成して漢字を子どもたちに提示したところ、子どもたちが興味を示したためスムーズに取り組めたという経験があるそうです。ちょうどそんな時に、石井先生との出会いがあって、以後、漢字教育はより深く、広く発展することになりました。

この他、足立区内には、竹塚、カワイ、永昌院など一〇を超す実践園があります。

台東区の今戸幼稚園でも、のぞみ幼稚園と同じように、「漢字教育はすでに昭和三十五年から私の独自の方法で行なっていた」と園長の今津一雄先生は自信を持っていいます。当初から父兄の反対もなく、もちろん石井方式の導入とも相まって、以後、漢字学習は引き続いて行なわれ大きな成果をあげています。

そのほか、実践園が多いのは、葛飾区でしょう。なかでも、明和十三年の創立で、卒園生がすでに七千名余りも数えるという古い歴史を持つ上平井幼稚園は、昭和五十年に石井方式の採用に踏み切っています。理事長が石井先生の講習会に参加、その理論に感銘を受けたのが、導入のキッカケだったといいます。始めのころは父兄には、〝漢字で教える〟のを〝漢字を教える〟ことと誤解され、それを解くのに苦労したようです。また先生の方も、抵抗感のある人とない人と、その受けとめ方が分かれたために混乱しましたが、今では園をあげて取り組んでいるということです。

この上平井幼稚園の実施方法は、園のなかで生活指導に使う名詞を漢字カードにし、子どもの持ちもの、ロッカー等には全部漢字で名前を表示、その他ボール紙に漢字を書いてパズルをつくったり、漢字カルタ取り、そして漢字絵本の読み合わせ……と様々です。

子どもたちは、乗り物に乗っている時や街を歩いている時、目にふれる看板、広告、駅名など、知っている字を大きな声でいったり、わからないと大人に尋ねたり盛んに漢字に興味を示しています。なかには、お互いの名前に〝木〟の字が付くことを二人が発見し、そのため仲良しになった、という微笑ましいエピソードもあります。また、これは大阪・貝塚市の木島幼稚園（二六七頁）での経験と似ていますが、知恵遅れの子どもたちにとって、かなよりも漢字の方が一文字で意味が取れて理解しやすいこと、つまり、パズルやカードで根気よく続けますと、漢字が読めるようになり、同時に、思

考力、図形の構成力などが良くなるという変化に気づくことがあるそうです。漢字で教えることの優れた点が、みごとに表われた例といえるでしょう。

おなじ葛飾区でも、二葉幼稚園は、五十八年度に採用というもっとも新しい実践園。「石井先生の原理を知り、実際の指導を見て、幼児の才能開発に効果ありと信じた」というのが園長の檜山俊郎先生が石井方式を実践した動機です。園の先生方も数回にわたり石井先生の指導を受けて、最初持っていた懸念はすっかり消え、積極的に取り組んでいるとのことです。先生方の関心が深まると同時に、子どもたちの手応えもしっかりして来て、今後の見通しは明るいものがあると檜山先生はいっています。

保育室、下駄箱、廊下など、園児の目につくところを漢字で示したり、漢字読本の文章をゲームにするため、模造紙に文章を一部漢字を空欄にして墨筆で書き出し、子どもたちにその空欄に該当する漢字を当てはめさせる方法――といろいろな工夫をしています。子どもたちの変化や反応などについて、檜山先生は「本年度が最初ですから、現段階ではその変化は、徐々に表われつつあるといったところでして、いずれにしても、園児は興味を持って取り組んでいますので、今後の成果は必ず期待できる」と太鼓判です。これからが正念場というところでしょう。

葛飾区内では、他に明昭第一、若草など数園が実践中という状況です。

他の区内の現状をザッとみますと、それぞれ代表的な実践園としては練馬区のみのり、北区の日の基、江戸川区の松本、新宿区の自證院あやめ、墨田区の本所白百合、杉並区の梅菊の各幼稚園があり、そして、板橋区には大東文化大学付属の青桐幼稚園があります。

この青桐幼稚園の園長は石井勲先生その人です。高島平の団地群の一角で、都立高校、養護学校、公園などに囲まれた静かな環境にあります。昭和四十五年に、幼少教育の重要性に着目し、全国の大学に先がけて設立された大東文化大学幼少教育研究所の初代所長に石井先生は就任しました。また、これにほぼ二年遅れて開園した青桐幼稚園の顧問としても、石井先生は様々な形で指導に当たって来ました。それから七年後の五十四年五月に、園長に就任しました。

園児故は約三〇〇名。石井先生は、「全国の実践園の先頭に立ち、職員一丸となって努力しています」と意欲満々。漢字絵本、フラッシュカード、漢字カルタなどはもちろん、ここでは大阪の小路幼稚園と同じく、論語、唐詩などを導入し、先進的な漢字学習が実施されています。

「漢字学習は少数の子どものための英才教育ではないし、まして子どもに無理強いをして知識を与

える早期教育でもない。幼児や小学生こそ漢字を学ぶ〝適時期〟なんです」という石井先生の長年の持論が、そのまま研究実践され、全国から注目されている幼稚園です。

最後に都下の各市ではどういう状況にあるのか、見てみますと、意外に早くから漢字学習を実践している園のあることがわかります。たとえば、三鷹市のなおび幼稚園（大越金吾園長）は昭和四十五年から早々と石井方式を採用、西多摩郡瑞穂郡の福正寺松濤幼稚園（木下多喜子園長）も同じく四十五年からと早くからはじめています。両園とも、当初はどこの園でも経験するところの教師の不安感を克服した後は、スムーズな漢字教育が成果をあげているそうです。松濤幼稚園はまた、福生市の福生多摩幼稚園と共同歩調をとって進めているとのことです。この他、町田市の関進、町田文化幼稚園、武蔵村山市の東京多摩幼稚園、府中市の府中新町幼稚園などの代表的な実践園があって、毎日子どもたちが漢字で楽しく遊び、学習をしています。

11. 卒園生たちのために——国語教室への招待——

大阪から出発した全国の〝実践園めぐり〟もようやく東京でしめくくることとなりました。石井方式の〝パイオニア〟である小路幼稚園からはじまって、実に様々な、ユニークな実践園のあることがおわかりいただけたかと思います。石井方式という原理を基本にする点では、いずこももちろん変わらないのですが、その具体的な実践方法は各園によって変化に富んでいます。

社会一般で普通に使われている漢字は、それをそのままの形で子どもたちに提示しよう、書くことの前にまず読めるようにしよう、子どもたちにとって漢字はひらがなよりもやさしい……こうした原則に基づいて、漢字絵本、漢字カード、漢字カルタといった教材に則った〝オーソドックス〟な指導方法が最も広く採用されていましたが、一方、俳句、諺、百人一首から論語、唐詩にまで、学習の領域を拡大、深化させている実践園もありました。まさに、多彩な日本の幼児教育を象徴しているではありませんか。

とはいうものの、幼稚園、保育園における漢字学習の普及率を全国的にみますと、まだまだ普及する余地を残していることはいうまでもありません。その意味では、石井方式はこれから発展する原理、方法と思えるのです。

問題は他にもあります。幼稚園、保育園の子どもたちが、漢字を覚えるのに最も適した時期であっ

て、この時期に様々な方法で漢字に親しむことのすばらしさはいうまでもありませんが、同じく漢字を本格的に学ぶ時期として、最高にその可能性を持っている小学生の段階において、果たして適正な漢字教育が行なわれているのかどうか、という問題です。

残念ながら、いまの日本の小学校で、〝適時教育〟としての漢字教育を本格的に実践している学校は極めて少ないのが現状なのです。本巻のⅢで詳しく紹介されている島根県の出東小学校のように、全校あげて、それも昭和五十一年から連綿と続けられているところは、他に見当たりません。もちろん過去には、青森県弘前市の船沢小学校を始め、新潟県の亀田東小学校、静岡県熱海市の桃山小学校、同県三島市の三島東小学校、佐賀県佐賀市の西与賀小学校、さらに、北海道旭川市の大成小学校などが、全校あげて石井方式を採用しましたが（朝日新聞「社説」昭和四十一年三月四日付〝石井方式を考える〟より）、教師の転出などの事情で、立ち消えになってしまいました。また、学校としてではなく、個々の志ある教師が、独自に、そして地道に、小学校低学年からの本格的漢字学習に取り組んでいる例は、これまでにいろいろとありました。現在もないわけではありません。

たとえば、千葉県船橋市の金杉台小学校や新潟県の酒屋小学校の例、さらに、先の出東小学校の先生方のなかに、転勤などで学校が変わっても、同じく石井方式に基づく漢字教育を続けているケースもあります。教師個人のレベルでは、こうした例はあるわけですが、もちろん、これらをすべて把握することは困難です。いったい、全国の小学校で、どのくらい行なわれているのか、正確には確認できていませんが、まだまだ〝少数〟であることは間違いないようです。

ですから、いまのところ、仮に幼稚園なりで漢字学習を受けて卒園したとしても、小学校段階では、ほぼ石井方式とは違った学習指導要領に則った漢字学習を受けなければならないことになってしまうのです。「漢字よりまずかな」「読み書き同時学習」へと逆もどりの恐れ十分、ということです。

そこで、こうしたギャップをどう埋めるかが大きな問題となってくるわけです。漢字学習を施す実践園の卒園生たちに、引き続いてそのレベルに見合った形の学習をどう進めるかーーこれは、ある意味で年来のテーマでもあったわけですが、そこに焦点を当て、石井先生が 会長となって発足したのが「石井式国語教室」です。（事務局＝石井式国語研究会内／東京都渋谷区東三―二四―九―七〇二）

スタート時の五十三年度で、すでに「教室」は計十数か所あります。いずれも、漢字学習を実践する幼稚園に教室を設置し、その卒園生を中心に、石井式の教育を受けなかった子どもも含めて、小学

校一年生から三年生までを対象にして、国語力の維持と増強を図ろうとするものです。多くの父兄の要望に応え、実践園での漢字学習を継続発展させる機会が訪れたといえるでしょう。

国語教室は、次のような認識に立っています。『小・中学生の半数以上が教科書の内容がよくわからず、毎日つらい学習を強いられ、学校嫌い、無気力、無感動な非積極的学童が増えている』という最近の調査結果は、登校拒否や非行にもつながる大きな問題です。これはひとえに漢字を知らないための読解力の不足、小学校低学年での国語教育の欠陥によるものです。国語の時間に憶えようとしても憶えられなかった漢字の出てくる、社会や理科などの他教科も、理解できないのは当たり前。さんすうの文章題の解けないのも当然です」

そして、「いま幼児教育のなかで、大きな波のうねりのように広がりつつある石井式漢字教育は、もともと小学校の国語教育の中で生まれたものです。〝広く小学生にこの教育を〟――それが年来の夢でした。いまそのスタートを切ります。どうぞあなたのお子さまにも、このチャンスを与えてあげて下さい」と、実践園の卒園生のみならず、広く子どもたちの国語力の発達を願う父兄に訴えています。

実は、こうした試みをすでに昭和五十一年から実施してきた幼稚園があります。それは前出の東京足立区の梅島幼稚園です。ここでは、園児の父兄の希望に応え、週二回、月六回、一回九十分程度で、小学校の一～四年生を対象に実施されて来たのです。ここでの実践経験が、今回の国語教室のモデルともなったわけです。幼稚園時代よりさらに漢字力が豊かになり、読書力が身について、各学科の成績も向上したというその実績が、国語教室開設に当たっての大きな原動力ともなり得たといえるでしょう。

さて、国語教室を開講している主な幼稚園は、以下の通りとなっています。東京では、板橋区の青桐、足立区の梅島、いずみ、永昌院、鹿浜愛育、竹塚、のぞみ、葛飾区の上平井、小平市のなおびの各園。また、神奈川県では、川崎市のひかり、横浜市の城郷、横須賀市の城北、そして三浦市の徳風の各幼稚園です。この他、北海道の駒沢苫小牧も国語教室を開設し、三十数名の小学生が参加しています。

小学校一年～三年生を対象としたその〝カリキュラム〟は、一教室に十人から十五人の生徒が参加し、ペースは週二回と週一回の教室とが半々ぐらいずつあり、時間は概ね、一回に六十分から九十分といったところで、いずれの教室も、中学や高校で、国語を教えていた先生方が講師の中心となって

います。教材としては、主として漢字絵本を使用し、その他にも独自の読本を用いたり、算数の文章題を材料にしたり、もちろん、漢字カードやカルタを使用する場合もあり、各教室によってバラエティに富んでいます。

これまで約半年にわたり、この国語教室が開かれてきたわけですが、実際に子どもたちを教室へ通わせている父兄の反応を見てみますと、一、二年生の算数の文章題など、ひらがなばかりでは解けなかったのが、漢字が入った文章題の場合、どうしてこんなにも理解が速くなって解答できるのか、という驚嘆の声があがるなど、国語力の遅れが目立つ子どもを持っている父兄の期待感が、ありありとうかがえるものです。それに普通は漢字の書き取りを嫌がる子どもが、逆に好きになるといったこともあります。

本来ならば、当然小学校でカバーすべき事柄であるにもかかわらず、こうした国語教室が補足すること自体、いささかの矛盾はあるといえます。しかし、それを放置しておくことはできません。また、こうした教育のあり方が、逆に小学校での漢字教育に反省をうながす一つの契機となる可能性も、充分に考えられます。子どもたちにとっても、父兄にとっても、期待するところは大きいといえるのではないでしょうか。いつの日か、日本全国の子どもたちが楽しい漢字学習を通して、豊かな国語力を獲得するように、やがて石井方式という名称が消えさり、それがごく当然の教育方法となる日をめざして……。

（双柿舎編集部）